

平成26年（西暦2014年）11月

瞑想録（その2）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。その瞑想の主題は、東洋思想に基づく「連続体と蓋然論理」です。究極的には科学と対をなすと思っているものですが、科学周辺に位置するものの、科学そのものではありません。学問でもありません、再現性も絶対真も保証しないことを「売り」としているからです。また、瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明も含まれています。特に主題以外の部分には、現行の常識では「誤り」とされていることやタブーとされていることも含まれていますが、あくまでも主題を見て下さい。その上で言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。なお、「真理は深いほど簡潔であるべきだ」と言う立場からは、この論集における何十頁ものだらだら書きは、残念ながら私がまだ真理の核心に到達していないことを、如実に表しています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

1、被曝と鼻血

最近、人気漫画の「おいしんぼ」で、福島人の多くに鼻血が出るとか、福島の特産を食うと鼻血が出るとか、そういう話がまことしやかに載っていて、物議を醸している。福島県人は「風評をことさらにあおる悪質な描写」と怒り、政府筋も「科学的根拠が全くない」と火消しに躍起で、と思えばフェイスブックに写真入りで「毎日鼻血です」と訴える元町長まで居る。

たしかに科学的には「あの程度の低線量の被爆では、疫学的に疾病との有意な相関はない」が定説になっている。そして現代の民主政治は、かつての祈祷やまじないと異なり、事実に基づいて行うのが建前だから、科学的定説に基づいての反論は合致した手続きである。もっとも政府は、原発推進と言う「殖産興業」の目的ありきで、ちょうど使える手元のネタを奇貨として、ことさらに安全を擦りこもうとしているだけであろうが。

では元町長の「毎日鼻血」はありえないことなのか。科学は、特に疫学は統計学であるから、あくまでも平均や集団について語るものであり、特定個人に固有の特質については無力である。いわゆる科学教の人々は、この点を忘れて科学を盲信している。

常識的かつ蓋然的に言えば、この町長のこれまでの経緯からは、政敵に対する単なる当てつけあるいは嫌がらせであろうと思われるが、この人だけに何か特定の理由で被曝が作用したとしても、科学としてはその説を肯定も否定もできない。

それ以上に科学教の人々が間違っているのは、「全ての事が科学の手続きで解決できる」と盲信していることで、これはもう宗教の世界である。科学的手続きが適用できるのは、物事の数や量に当たる部分のみであり、数や量にならない、形質とか品格とか、あるいはコツとか勘と言った面は、我々人類は経験によりその存在を現実的に受け止めているにもかかわらず、決して科学的証明を伴ってはいない。

かつて、典型的な科学者でお茶の水大学名誉教授でもある藤原正彦センセーは、「国家の品格」と言う本を書いてベストセラーになった。ベストセラーになったという事実が、多くの人が品格と言う概念を前向きに受け止めていることを「証明」してはいるが、しかし「品格についての科学的根拠」については、この本を含むどこでも語られていない。科学者が科学でないことを書いて小遣稼ぎをする、これは厳密には異端である。だが、品格の他にも武士道とか、手相とか、陰陽道とか、料理のコツとか、かんなのかけ方とか、人々はむしろ例外的程度にしか科学に頼っていないことは歴然である。

ただ他方で、科学的手続きを全く無視すると、「何でもあり」の無秩序になってしまう。「科学を越えた真実」は多数あるものの、もし「信じるところがすべて科学を越えて真」とするならば、どんなカルト宗教も、出まかせの嘘っぱちも、間違いのたわごとも、少なくともその人その場では全て、蓋然的に真になってしまうのだ。世の中には万有引力を信じない人も居る。それ自体は自由だが、そんな人だって穴があれば落ちてしまう。つまり信じていなくても現に作用している、これが科学の他宗教と異なるところなのだ。

ではこと「被曝で鼻血」は、もちろん非科学であるが、これを「科学を越えた真実」と言っただけで良いのだろうか。それとも、仮に多くの人が信じたとしても所詮はせいぜい集団催眠やカルトのようなものなのだろうか。これは一種のグレーゾーンと言って良い。蓋然的判断にグレーゾーンはつきものである。こう言う蓋然は結局、本人や他人に深刻な被害が及ばないのなら、各人が自己責任で「信じる・信じない」を決断する種類のことであると言える。蓋然真は、「最低限を確実に保証する」という意味で科学と兄弟で、かつこれを前提とする民主主義の手続きには乗らないから、蓋然真を根拠に補償金をもらえるとはおよそ思えないが。

瞑想録（その2）

さて以上は、主として科学及び科学を越えた蓋然的真実と、その取扱いについて見てきたが、最後に被曝の問題を題材に、科学の実態について簡略に見てみたい。科学と言えは無謬で厳然たる不可侵な真実だと言う刷り込みが一般にあるが、実はその「真実」の根拠は強弱があって、実は多種多様である。例えば先に引用した万有引力、これを直接見た人はいないけれども、かなり強い根拠を持つ。実際に帰納法的ではあるが無限に近い膨大な数の検証がなされ、いまだに例外が見つかってはいない。

では被曝と疾病の関係の根拠がここまで強固かと言うと、決してそうではない。今までに低線量被曝での発がんや死亡が認定された人はいないが、これは「真っ黒は1例もない」と言うだけで、現実には広大なグレーゾーンがあるのだ。定性的には「遺伝子がちぎれるのだから影響がないはずがない」「アポドシスと呼ばれる自浄作用があるから大丈夫だ」「被曝よりよっぽど強力な宇宙線を浴びているのに人類は生き残っている」「恐竜が被曝で絶滅したという説がある」等々、色々言われている。それらは一々そうなのだろうが、では全体としてどうかと問われると、「何も分かっていない」のが実は正解なのだ。何も分かっていないから、「大被曝の場合の死亡率から線形近似すると、低線量での死亡率は隕石に当たる程度だ」と言う説が、「最も科学的」な根拠として採用されているだけなのだ。

だから低線量被曝と鼻血の関係を積極的に否定する根拠は、仮にこの問題が「科学の内部に収まる物理的な問題」だとしても、かなり薄弱である。常識的には因果関係は低いであろうが、この推測はあくまでも蓋然である。ということは、この世界では蓋然の方が科学より信じられちゃうのだ。実際深掘りしてみると、なぜ「線形近似が科学的態度」なのか、不思議である。「二次相関や指数相関を設定する積極的根拠がないから線形近似だ」と言うだけのことで、これは更に「線形近似が最も不作為な行為である」と言う信仰に基づいているのだが、ここまで突き詰めると線形近似の採用は信仰以外の何物でもない。だが、とりあえず何か決めておかないと原子力発電と言う「有用なエネルギー源」の利用ができないので、ここは「科学のご利益主義」の立場から、「どうしても良いからとにかく決めて前に進んだ」だけなのだ。

結局この問題は、政治的には「科学的根拠なし」で火消しして補償は一切せず、常識的には「そんな低線量で死ぬわけない」の常識論で蹴り倒し、さらに福島県民向けには「被災した人々に失礼だろう」の非国民宣言で乗り切ると言う、三枚舌の現実論で乗り切るのが正解だろう。まじめに議論する奴が実は一番に「一人で相撲の愚か者」なのだ。

2、トンデモかひらめきか

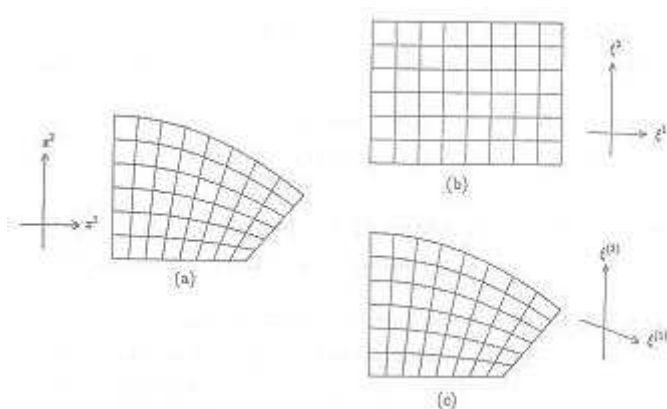
$$(1) \quad \nabla_{\ell} V^m = \frac{\partial V^m}{\partial x^{\ell}} + \Gamma_{k\ell}^m V^k$$

$$(2) \quad \mathcal{D}_{\mu} \psi_j(x) = \partial_{\mu} \psi_j(x) - ie A_{\mu}(x) Q_j \psi_j(x)$$

ちょっと専門的な話になってしまうが、高校までの数学で習う微分は厳密には、「直線に沿った微分」である。では「曲線にそった微分」、あるいは「曲がった空間での微分」はどうかと言うと、これはある。「共変微分」と言って、従来の微分に「接続項」と呼ばれる補正項を付加することによってなされる(上の式(1))。

アインシュタインが発見したように、一般相対性理論では物質があると重力により空間が曲がるが、この曲がりを共変微分で表現することにより、彼は一般相対論の定式化に成功し、かつその仮説が正しいことはその後の幾多の測定により科学的に確定している。

この接続項に係る接続係数は、数学的には空間上の異なった2点間の平行関係を定めるものであるが、つまり接続係数の入れ方によりどんな平行でも理論上は導入できてしまうのだが、アインシュタインが用いた接続係数は、空間が平たい極限ではユークリッド幾何におけるベクトルの、斜交座標系の向きに合わせた補正係数に落ち着くような、最も基本的な接続係数であった。その意味で彼の接続と共変微分は、我々の従来の常識の、最も自然な拡張になっている微分なのである。



ところでこの「曲がりの表現」を、アインシュタインとは逆向きに取った数値計算法が工学領域にはあって、BFC(境界適合座標系)と呼ばれている。相対論が、曲がった空

間を出来るだけ「真直ぐな」座標系から見て記そうとしたのに対し、BFCでは真直ぐな空間をあえて曲がった座標系から見ようとする手法であり、座標系の曲がりの補正に接続項や共変微分を用いると言う訳である。そしてこの理解からは、「BFCの接続係数も平らな極限ではユークリッド幾何に収束するようなものであるべきだ」と言えるだろう。

ところが工学の目標は物造りであり、物さえできれば理屈の多少の無理は黙認されることがある。そしてBFCについても、主として工学者の数学的無知により、自由勝手な接続項が設定されて現に使われている現状にある。これは数学の保守的な立場からは、「トンデモな科学からの逸脱」に見えるだろう。

ここで、やはりところが、歴史は前後するものの、素粒子論の専門家が量子電磁気学の定式化に於いて、関係する接続項を、「空間の曲がりの補正」はおろか、「電荷に置き換えてしまえ」と言うアイデアを出した(上の式(2))。言わば、電荷の存在が「空間を曲げることにより量子場に作用する」とみなしたわけである。この発想は深いひらめきに基づいているが、もしトンデモと言うのなら一見、先のBFCの例よりもっとトンデモである。しかしながらこの発想が正しかったことが、後の実験により証明されてしまった。

つまり電荷と電磁ポテンシャルを接続とするという定式化は、実は正鵠を得た正しいひらめきであったわけである。そしてこのひらめきの深さは、もしこの定式化が実験により否定されたとしても、言わば「発想法の見本」として人類史に残るべきであるほど素晴らしい物なのだ。そしてある意味この発想の延長上に、現代の素粒子論がある。

以上の反省から再度、先の工学者の「勝手なBFC」を見ると、もちろん彼らは無知ゆえに自由度を勝手に乱用しているだけなので、正当化される余地は全くないものの、結果として工学の究極的目標である「物作り」に実際に役立っているのであるから、この立場からはむしろ許容され歓迎されるものであると言える。そして数学者には、いたずらに保守的になるよりも発想を切り替えて、BFCの拡張された接続についての数学としての拡張と定式化を期待したいほどになってくる。

専門的な例の提示が長くなったが、科学技術の分野に於いてすら、トンデモがむしろ理論発展の新たな突破口になることは十分にあり得ることなのだ。むしろ真に革新的なアイデアは、あるいはSTAP細胞もいずれはそうなると予測しているが、いずれもそれまでの常識を打ち破るトンデモから出ている。地動説然り、大陸移動説然り、種痘法然り、超流動然り等々である。

瞑想録（その2）

まとめるとつまり、トンデモの全てとは言わないが、むしろそのうちのごく一部だろうが、100年後には常識になっているトンデモが、きっといくつかあるだろうと予測する。そしてそれらのトンデモが常識になった暁には、「最大級のひらめきであり人類史の輝かしい成果である」と称賛されることだろう。それは、従来の発想の延長上にあるノーベル賞研究すら色あせて見えるほどではないだろうか。

考えてもみよう。人類の知的資産の全部が、トンデモには遥かに及ばない「当たり前」の単なる延長」でしかなかったとしたら、人類の日々は相当退屈なものになるだろう。人々が推理小説を読むのも、馬券を買うのも、野球中継に見入るのも、いずれもある種の予想外、トンデモを期待してのことではないだろうか。お笑い芸人が面白いのも、その気付きの奇抜さ、トンデモにあるのではないか。だとしたらトンデモが科学に認定されるのは、さぞかし痛快なことだろう。

あるいはそこまで行かなくても、せっかくの面白いひらめきやアイデアを、「今自分が居る業界ではトンデモとされてしまうから」という理由であきらめずに、むしろその新奇なアイデアが正統化されるような別の分野（例えばSFとか文学とか）を探す、あるいは既存の分野で座りが悪いならそのアイデアを正当化するような新規な立場を提案するくらいの要領と柔軟さがあっても良いのではないだろうか。ひらめきと知恵は人類の宝であり、それを「既存の常識に反する」と言う下らない理由で捨ててしまうとしたら、それは余りにもったいないことだ。

3、スタバのタンブラー



瞑想録（その2）



コーヒーチェーンのスターバックスが、オリジナルのタンブラーを販売しています。上の1枚目の画像で左の赤いのが大、右の黒いのが小です。そしてこのタンブラーは側面が2重になっていて外の壁が透明なので、その狭い2重の隙間に好きな絵を挿入できる仕組みになっています（画像の→部分）。つまり、オリジナルの「マイタンブラー」を作れるようになっているわけです。

ちなみにその「好きな壁紙」は、画像の下部の細くなっている方の蓋を外して挿入するようになっています。2枚目の画像は上が太いように見えますが、それは遠近法のせいで、実際はひっくり返して撮影したものであり、壁紙を差し込んだ様子が映し出されています（画像の→部分）。

うちも娘が新しいものが好きなので、早速入手してきて、適当な壁紙を差し込んだりしていましたが、早速問題が生じました。いずれの問題もスタバ本部に問い合わせたのですが、残念ながら有用なアドバイスは得られませんでした。さて、以下が問題です。皆さんならどう対処するか、頭の体操をしてみてください。

* * * * *

<問題1>コピー用紙のような薄い紙を隙間に挿入したところ、摩擦で吸い付いてしまい、取り出せなくなっていました。娘は画像を何回も取り換えて楽しめたのですが、一旦入ってしまうと狭くて楊枝くらいしか挿入できず、無理に引っ張っても端

瞑想録（その2）

が破れてくるだけでした。どうしたら紙全体を抜くことができるでしょう（回答はこの記事の最下部）。

＜問題2＞今度は厚い紙を挿入したので破けてはきませんでしたが、周囲を丁度の寸法に切ったので、狭い口から引き抜こうとすると紙が次第に丸く狭められて途中で端同士がぶつかり合い、それ以上抜けてこなくなっていました。どうしたら良いでしょう（回答はこの記事の最下部）。

それではここから回答、私の場合の工夫例を紹介します。

＜回答1＞タンブラーの上部をぽんぽん叩いて壁紙を一旦上にずらしたうえで、今度逆に下側からとんとん叩いたら、摩擦の微妙な違いから斜めになって出てきたので、その端を指でつかんで全体を引っ張りだした。

＜回答2＞厚い紙をいったん中に戻し、その両端の隙間に薄い紙を、両端の片方が上にもう片方が下になるように差し込んだ上で引き抜いたら、今度は両端が衝突せず、無事に引き抜けた。

もしかしたらもっとうまくやり方があるかもしれませんが、一応これは自分なりのひらめきのつもりでいます。別のアイデアやトラブルを思いついた方は、もし宜しければコメントを入れて行って下さい。

こう言う、一見不可能なことを可能にする智慧とひらめきこそが、真の数学だと考えます。今の「キリスト教数学」は、当たり前のことを「証明」しているに過ぎない。

特になぜこの「小さな気付き」を記録にとどめたかと言うと、従来の発想の水平線上あるいは延長線上にある気付きなら、あるいは人工知能で計算機によってできるかもしれないが、こういうそれらを越えた発見的気付きこそが、人の気付きの最も特徴的なことだと思うからである。こういう発想はアナログ脳がないと気付けないだろう。初等幾何の補助線で気付く発見的方法、これが一番に人の脳を鍛えるのであって、きまりきった式の変形など、何の役にも立たない。

4、要らない仕事

つらつら考えるに、特に最近のICT技術の長足の進歩も念頭に入れると、現状「実は要らない仕事」が結構ある、つまり慣例的に結構残っていることに気付く。ICT技術の進歩により、集計とか大量販売といった職種はかなりネットに置き換えられていて、この辺は評価できるのだが、まだなぜか残っていて消えない仕事もある。もちろん「合理化こそ善だ」と断言するほど欧米かぶれではないが、それにしても如何にも無駄な仕事の典型を以下に3つ挙げる。

(1) 一番目につくのは、特に高級品の販売職だ。例えば宝石とか自動車とか、こういうものを売る販売職は、お馴染み客の誕生日や家族構成や趣味まで事前に勉強してから販売に臨むと言うが、これって必要ない努力だよ。販売員を置くとしてもせいぜい家電量販店程度に、ショールームの説明要員を数名置いて、あとはアフターケアのシステムさえ作り上げれば済むことだろう。無駄な努力、これはいくら日本が共生社会でも、廃止したい。

(2) 第2に旅館の接客係。仲居さんとかだ。シティホテルはかなり簡素化されたが、老舗の温泉旅館など客より仲居の方が多いほどだったりする。こう言うところに客が行くから残っているのだろうけど、そう言う客もことさら人にほだされるのが好きな金余りのおばさんたちだったりするのだろうけど、客観的に見て無意味な雇用創成としか思えない。逆の意味で気が効かなさ過ぎて、バカらしい。

(3) 第三に、意外と見落とされているのが教師だ。そもそも素朴な疑問だけれど、教科書は大量印刷一括購入なのに、何で教師だけクラス単位なのだろう。やっていることが中途半端じゃないだろうか。現に予備校や資格学校などマスプロのネット授業が普通で、しかも成果を挙げている。だから学校だって、演習や実技は専任講師を置くにしても、座学は全部ビデオにして、あとはクラブ活動監督兼人格形成要員を数名雇っておけば済むことではないか。

役所の無駄を挙げる人はよく居て、たしかに彼らの言う通りなのだけれど、上記したようなセクターが意外と忘れられている。もちろん単に彼らを解雇して職位を無くしただけでは、失業率が上がって貧富の差が開いてしまうだけなので、国全体でのワークシェアやリバランスが必要だが、シェアと抱き合わせなら、これらの既得権者の抵抗も少なくなるのではないか。

瞑想録（その2）

ところで、冒頭で挙げたICT技術の飛躍的進歩、これによってそもそもの雇用構造自体が大きく変化している点にこそ注意したい。具体的には、単純集計とか大量製造販売といった業種に、業界を問わず人手がほとんど要らなくなっている。一昔前までは切符を買うのもビールを買うのも一々対面販売・購入だったことを想起してほしい。これらの手間が省けて、余計な人件費が圧縮されたので、私どものようなプア充が困らずに生きていけるようになったのだ。なお、上に記した「3つの省力可能候補分野」は、省力化の余地がまだ残っていることを例示したものである。

要するにICT技術は、それまでの人類の仕事のうち圧倒的に多かった、「中位の能力の人たちがする仕事」をほぼ抹殺した形になっている。その結果、現状そして近未来の仕事は大きく、(1)M&Aのように頭脳を使いかつ社会的影響も大な仕事か、(2)ごみの収集のように頭は使わないが人海戦術の仕事かの、全く異なった非連続な2種のみに構造変化してしまったのだ。と言うことは、人数的に一番多い「中位の能力の人」は、(1)の頭脳労働を選んで落ちこぼれるか、(2)のマンネリ仕事を選んで兵隊になりきるかのどちらかしかなくなって、「いずれにしてもはまらない」と言う不幸な構造に陥ってしまっている。

そしてこの構造が更に不幸なことに、(1)の頭脳労働は定員がほぼ決まっているから、(1)の頭脳労働を選びたくてかつそれなりの能力のある人でも、仕方なく(2)のマンネリ仕事を選ばなければならないケースが増えていくと言うことだ。つまり一言で言うと、今後ますます仕事がつらくつまらなくなっていくのである。

そしてこれに追い打ちをかけるのが、70歳定年制だ。年金も70歳にならないと出ないようになるから、嫌でも70歳まで働かなければならないが、人の能力は50歳前から下降線を下るので、近いうちに「45歳第一定年制」がデフォルトになるだろう。そして45歳を過ぎた人たちはもう、頭を使うことも体を使うこともしんどいから、先に挙げた(1)の頭脳労働はおろか、(2)のマンネリ仕事も満足にできないということになる。結局この人たちには、政府が不要な仕事をことさらに作って、スズメの涙程度のご褒美をくれてやるしかなくなるのだ。

以上総合すると、今の若い人やこれから生まれてくる人々には、一部の幸運なエリートを除いて、ワークシェアとリバランスの効果はある程度は期待できるものの、基本的に絶望的で先の見えない長があああい奴隷生活が待っていると言うことだ。
アーメン。

5、技術の進歩は止められない

最近、国民の医療費総額が、国家の総予算と比肩するほどの侮れない勢いになっている。その結果国民一人当たり、特に若者が負担すべき天引きの保険代や介護料が、社会的軋轢や世代間の闘争を生むほどになっている。医療費のほとんど多くが老人医療向けだからだ。

先日知り合いの医者と話していて、「老人医療が変に進んじやったからなあ・・・」と、医師もやはりこぼしていた。専門家から見ても老人医療の最近の進歩は、財政面のみならず技術論としてもいびつで不自然なのだ。だが現に進歩してしまったものをわざと使わないなどと言うことは、人道上およそ許されることではない。

過去を振り返ってみよう。ここ20年におけるICT技術の進歩は目を見張るものがある。グーテンベルクの印刷術を「第1の情報革命」とするならば、ICT技術の進歩は「第2の情報革命」と呼んで良い。ICT技術のおかげで、膨大な知識が瞬時に、しかもタダ同然で入手できるようになった。つい200年前の江戸末期でも、海外情報を得る、しかも一般人がそれを書かれた書物で得るのはほとんど不可能であったのに、今はクリック1つで可能である。

もちろんICT革命にも負の部分がある。具体的には例えばウイルスのまん延だ。悪意のあるプログラムに依る情報操作、端末破壊、情報奪取などはもはや日常茶飯事で、しかも仕組みの複雑さゆえに対策が限界に近付いている。戦争も武力衝突よりも情報戦の方が深刻なほどだ。

また、最近話題のビットコインも別の好例だ。国や中央銀行の裏付けがないために極めて投機的で、暴力団やならず者国家の資金源としても使われ、しかも国をまたぐので犯罪捜査が極めて困難だが、でもだからと言って一度出来てしまった技術を、「問題があるから禁止する」などと言うことはおよそ不可能なのだ。ちょうど禁酒法と同じで、ヤクザな抜け道提供者を肥やすだけになってしまうだろう。

そもそも技術発展それ自身は善でも悪でもない。言わば勝手に発展してしまうのだ。だからこそ用い方によって善にも悪にもなり得るが、悪になり得るからと言って禁止できないのだ。「進歩してしまった」という現実を踏まえた上でより正しく使うように努力していくしか選択肢がない。それが技術進展の正体であり、これまでの歴史進歩に於ける例外のない法則なのだ。

瞑想録（その2）

内燃機関の発明が産業革命を誘起したことは周知の事実である。この革命によって、身近なところでは自動車が考案され、人々の暮らしは飛躍的に便利になった。自動車は時に人を轢く殺人道具にもなっているが、だからと言って自動車を禁止することはできない。そしてそれ以上に、自動車の考案と、専ら殺人のために使われる戦車の考案の間に、どれだけの差があるだろうか。ほとんど同時と言うべきだろう。つまり自動車と戦車は抱き合わせなのだ。ちょうど情報革命とビットコインが抱き合わせなのと同じことである。

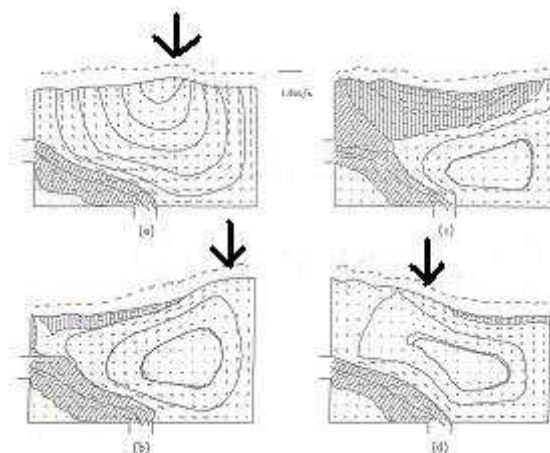
最近の老人医療のいびつな発展に話を戻すと、これは全く悪いことだけではない。似た技術が新生児の死亡率の低下や難病克服にも用いられているからだ。だからここでも、「技術の進展自体は無垢であって結果として善と悪が抱き合わせになっている」という構造に変わりはない。だが、現状でも1人当たり平均で終末の5年は、寝たきりか要看護状態にあると言う。これが10年になるのは時間の問題だろう。

これは何を意味するかと言うと、人はひとたび生まれた以上、最後の死の前の10年は不本意な不自由生活、言わば社会の社畜たることが運命づけられているということだ。しかもこの「望まない不幸な延命」のための膨大な経費をひねり出すために、人は20歳から70歳までの延々50年間も、会社の社畜と言うこれまた全く望まない不幸な社畜人生を実践しなければならないということになる。つまりこれからの人には、「人生全部社畜」のハメが、本人の否応なく約束されているということだ。そしてこれら老人の家族介護の重労働まで考えると、もう気が遠くなりそうになる。

もちろんこのトレンドに対し、一条の光明すらないわけではない。おそらくあと20年もすれば、技術進展によって、家庭用介護ロボットも実用化されているだろう。だが、先ほどから述べている「技術の抱き合わせ」法則を忘れてはならない。自動車と戦車の組み合わせよろしく、介護ロボットの実用化と殺人用兵器ロボットの実用化はおそらくほぼ同時であって、これまた実に抱き合わせなのだ。

結局人類は、技術の進歩と言うある意味努力の結晶、現実的にはまぐれ当たり起因するいびつで偶発的な技術発展に翻弄され続けているのだ。過去も現在も未来も永劫に、これが実に人類の現実なのである。

6、パルスの生成消滅



ダムとか風呂とか金魚鉢とか、液面のある水が容器内にあって、その容器に水の出入り口があって水が定期的に循環しているようなシステムは、我々の身の回りに多い。そんな「容器内液面流体」が、希にはあるが、液面が勝手に左右に遥動して不安定になってしまうことが知られている。上の図はそのような現象の数値解析結果である。

液面形状をつぶさに観察すると、実験でも確認されているのだが、図の(d)つまり循環流の下流側(左側)に登りきった時に、液面の真ん中あたり(図の↓の部分)でパルスのような「波」が生成され、これが図の(a)のように上流側(右側)に遡上して行き、図の(b)の上流側(右側)が上がりきったところで、先ほど生成された波がその上がりきった部分に吸収され消滅するというプロセスが観察できる。そしてこの波の生成消滅が液面遥動の原因であるという説が提案されている。

さて、今日の記事で話題にしたいのは液面遥動そのものでなくて、その原因と目されている「パルス波」の方である。この波だが、我々が身の回りで良く見るような、池に石を投げた時にできるような普通の波とは、いささか異なっている。第1に単発であって正弦波のように連なっていない。第2に壁に当たっても反射しない。そして第3に無から生成され別の塊に吸収され消滅しているのだ。

そもそもこの液面遥動と言う現象も、ことさらに加震しているわけではないが、と言って火のない所に煙は立たないのであるから、定常循環流から何らかのチャンネルでエネルギーをもらっているはずである。そもそも上の図の容器内の流れだが、単に水が入り口から出口に流れ去るのではなくて、容器の右上方に定常循環流を誘起すると言うのは、流体の移流項(非線形項)が原因であるから、その上に形成されるパル

ス波も、何らかのチャンネルで移流項（流れを移送する力）からエネルギーをもらって生成消滅していることは、予想しやすい。

ここではそのチャンネルの詳細は記さないが、図の(d)で液面の真ん中あたりにパルス波が生成されるのも、それが流れに逆らって遡上するのも、そして図の(b)でタイミング良く吸収されて消滅するのも、実は全部この同じ移流項の、様々な形での働き、現れなのである。その意味でこのパルス波は純粹に非線形波と言って良い。

非線形波と言うとおなじみなのが、KDV 方程式で記述されるソリトンである。そしてソリトンは非線形項も有する波でありながら解析的に記述できる、その意味で極めて希有な波でもある。では今問題のパルス波はソリトンかと言うと、これが違う。ソリトンであるならば第一に壁で反射するし、第二に勝手に生成消滅しないし、第三に伝播速度も波高に比例するのだが、上記したパルス波はこれらのどの性格も有していない。

ではこのパルス波は、ソリトンとは別の解析式で陽に記述できるのだろうか。「陽に記述できない」事を証明するのは悪魔の証明の一種であって極めて困難なのだが、まずおそらく記述できないであろう。つまりそもそも解析式では記述できなくて、あくまでも数値解析でのみ再現できる波なのである。そしてその単発性と独立性から、この波は粒子あるいはパルスの性格を有しているとも言える。そう見ると今問題の過程は、「解析的に表現できない粒子の生成消滅過程である」とも言えることになる。

もしそうであるとすれば、このような「粒子」の存在は何を意味するのであろうか。今までの物理は、「基本式や基本粒子は全て解析的に表現できる」と言う暗黙の仮定の上に立って築かれてきた。相対論も素粒子論も宇宙論も全てそうである。そして実際にうまく記述されてきた。この態度は数学におけるヒルベルト主義、つまり「いくつかの無定義用語さえ認めれば後は一から積み上げることによって全てを解析・表現できる」と言う信仰と同時代に形成され、かつ同じような形を取っている。

そして現代の数理科学者に求められているのは、あくまでもこの主義の上に立って出来るだけその枝を少しでも長くすることである。言わば「解析主義」、これは現代の数理科学の金科玉条であり、この信仰に立てない人はこのコミュニティから永久追放されることになっている。だがこの信仰は私には、余りに楽観的すぎるように思えてならない。「全ては解析的に記述される」のではなくて、実は「宇宙の諸事実のうち解析的に記述され得るものだけしか現状理解されていない」のではないだろうか。

ここでかなり荒唐無稽な、トンデモな「仮に」ではあるが、上記した非線形パルス波のような素粒子が実はあったとしよう。これは「一から積み上げる」事では記述できないのだから、実験で運良く発見されない限りだれも記述しようとはしない。そして電磁力を始め物に働く全ての力は、その力を媒介する素粒子の交換、つまり生成消滅によって成されていることが知られている。

と言うことは、上記したパルス粒子を教訓とするならば、もしかしたらまだ見出されていない「第5の」物質や力があって、それは本質的に従来のような一からの積み上げや解析的記述を拒否しているものなのかもしれないのだ。ちなみに、場の量子論においては粒子の生成消滅は調和振動子の励起としてエルミート演算子で記述されているが、この理論展開も解析可能性を優先した単純すぎる描像かもしれない。

熱流動は古典中の古典で、ある意味幼稚ですらある。そしてだからこそ数値解析もより容易なのだが、そんな幼稚な分野からも、むしろ幼稚であるがゆえに、もしかしたら現状の壮大な数理科学に一石を投じ得るような教訓が見出され得る、この希に発生するパルス粒子の存在は、そんな戒めも含んでいるように思えてならない。

7、学問はしきたりだ

最近ちょっと用があって、久しぶりにエクセルシートを使って統計を取ってみた。集計したいデータは順序データと言って、あたかも駆けっこの順位のように、順番と言う数字は付くがそれらが等間隔とは限らないようなものだ。ダントツの1位もあれば鼻の差の1位もあるが、順位データはこの違いを無視している。

だから厳密には順位データを使った数量統計は出来ないのだが、少なくとも産業界では現実には結構使っている。実際私も平均や分散はもとより、検定や重回帰分析もやって、今回も直感では気付きにくいような意外な関係を導出できた。順位データの数量化扱いはもちろん万能ではないが、だから結果を盲目的には信じないが、極めて便利な、言わば蓋然的ツールである。

ところが多変量解析のこのような使い方、教科書ではことごとく「間違っている」と記述されている。つまりいくら便利であっても、理屈が少しでも緩い物は学問では禁じ手なのだ。融通無縁の世界である。まるでキリスト教の異端審問のようだ。そう言えば現場は別にして学術論文ではたしかにほとんど目にしたことがない。

瞑想録（その2）

学問的には順序データは、クロス集計とか散布図を作って、目で見て判断するしかない。目で見て判断とは統計学の有意水準の考え方に比べてかなり恣意的だと思うのだが、学術上の手続きとしては、こっちの方はなぜか許されている。実に不思議なことだが。

そこで教科書を良くよく読んでみると、最初の方で「順序データの計量データ扱いは間違っている」と書いてありながら、後半の因子分析の章では堂々と順位データを使った解析例が模範例として載っていて、更にご丁寧なことに「これは計量データである」と注釈まである。

実際臨床データや薬理データの多くは患者の感覚とか症状の度合いとかが素データになるから、これらは高々順位データだ。これに「数理統計が使えない」と言う建前を石部堅吉のように本気で墨守していたら、多くの薬が有用なのは明らかなのに使えないでお取り上げと言うことになってしまう。そして医学心理学サイトを見ると、たまにさもタブーのように、「現実には数学的厳密さよりも実用性を優先して用いることがある」と小さく書いてあったりする。きっと言ってはいけない本音なのだ。

結局どうも、順位データの数理統計は、「医学心理学の因子分析の場合は利用可が黙認されているが、その他の分野や統計法では依然として禁じ手だ」と言うことらしい。どう考えても理不尽な使い分けだが、この使い分けと言う学界のしきたりを学び実践するために、大学と言うところがある。

統計学の基本は「その分布が偶然だとしたら極めて希か」(有意水準)と言う素朴な設定であり、この設定に尽きると言ってよい。そしてこのようなことは大学生なら1日で学べてしまう。それにも拘らず世の中には「統計の専門家ござい」と自称するセンセーが結構居るが、彼らは決して数学や有意水準の専門家ではなくて、どうやら「どういう時にどこまでの統計手法を使うことが許される慣例となっているか」と言う細かい有職故実の専門家なのである。どうりで統計学の教科書は人文書並みに厚いわけだ。

さて、ここまでは数理統計を例に、学問が多分に有職故実の塊であり、融通の効かない非現実な神学であることを見てきたが、学問の他の分野だって現実には似たり寄ったりだ。例えば数値解析、理論上安定でない条件で数値解析しても運良く発散しないことがしばしばあるが、これを結果として受け取るか違反として棄却するか、これはもう先生ごとに判断が異なる、極めて面倒な問題になっている。数値計算よりも路線や気分やさじ加減の方が遥かに重いのだ。

ところがかつてこう言う有職故実を破った幾人かの専門家がいた。ガリレオを始めとしてダーウィン、ウェゲナー、ジェンナー、フロイト、トインビーと言った人たちだ。彼らは幸運なことに現在ではむしろ偉大な思想家として評価されているが、一介の研究者が彼らのまねをして有職故実を破ると、十中八九破門される。異端として火あぶりの刑となるのだ。

だから明日の飯が欲しかったら研究者たるもの、大それた野望は抱かずに、唯々諾々と有職故実の習得と模倣に専念して小さな「発見」に終始すべきだ。もっとも私がわざわざ忠告しなくても、みなさん器用にやっておられるが。

私個人は「大先生」などと言う聞こえよりも自由の方が欲しかったので、産業界と言う「役に立って儲ければ理屈なんてクソだ」と言う業界に入って今日までやってきた。その判断は間違っていなかったと思っている。ただ、産業界出身で外交官になった丹羽宇一郎氏が日中関係で反日的な発言をしてしまったように、世の中何でも融通がきけば良いというものでもない。この辺の取捨選択が難しい。

8、ジョブズ氏とヒッピー

（最初に断わっておきますが、私はジョブズ氏をソンケーもしていなければ、彼に関する成書を1冊も読んだことはありません。）

もう半世紀も前になるが、米国を中心にヒッピーと呼ばれる現象があった。今の若い人はもう知らないだろうし、私自身感性豊かなころにはもう終わっていた。ここでヒッピーを「運動」ではなく「現象」と記したが、それはヒッピーが特定の主義主張あるいはイデオロギーや政治行動ではなく、むしろ逆に「自分の人としての自然に従って生きて幸せになろう」と言う内的活動であったからだ。

その結束性の無さがあだになって、ヒッピーは最終局面では多分にセックスとドラッグになって流産してしまったが、その本来の精神には小生も共鳴するところがある。ヒッピーは欧米のキリスト教的科学主義的な規範が、社会秩序と物質的豊かさには威力があるものの、それが「人としての自然さを犠牲にして」であることに気付いた。こういうことに気づけたことが、余裕あるインテリの自己改革と呼ばれることにもなるが。

キリスト教は確かに人を教育によって「人らしく」する。ここで人とは、責任を持って義務を果たし、高度な技術社会に貢献できるスキルを保有することを言う。一言で言えば「働き蜂化」だ。だからキリスト教は蒙昧な未開の土人達に救いを与えるために、世

瞑想録（その2）

界中を愛で植民地にして荒らし回ったのだ。これは人にとっては裏表、余計なお世話である。ただ裸で寝そべっているよりはあるいは幸せかもしれないが、余計な人工的知識を強制注入されて有無を言わず仕事に叩き出されるのに嫌悪を感じる人も多いことだろう。

少なくとも初期のヒッピーはこういうことを真剣に考えた。そして自分本来の生き方のヒントを、より人工的でない東洋思想、自然生活、前衛芸術等に求めていった。彼らの最終目標は、既存の体制の刷り込みに汚染されない本当の幸せを追求する内的活動であったこと、組織化や主義化も体制的不自然として嫌ったことにより、伝道とか結束とかそういうものとは全く無縁であり、また同じヒッピーとは言いながら、それぞれが見出した答えも十人十色であった。

中には、もちろん無名であるが、「卒業」して真の幸せを得た人々も多々居ることだろう。だが運動全体は次第に形骸化し、ファッションあるいは集団運動化し、そしてその歯止めのなさゆえにドラッグとセックスに陥って消滅していった。

さて、アップル社を創設し、PCや携帯をクリックやワンタッチで操作する方式を開発した伝説の人物であるスティーブ・ジョブズ氏も、若いころはヒッピーであった。欧米の学問は一切せずに、参禅し瞑想し、菜食主義に傾倒し、書道を習い、靴もはかず風呂にも入らず、ひたすら長髪とGパンで過ごしていた。食うためには仕事もし、才能があったので儲けたが、やり方は多分に行き当たりばったりだった。そんなやり方には、儲けたことを除いてヒッピー的精神を見て取ることができる。

さて、先にも述べたようにヒッピーとは体制化を拒否した内的純化活動であるから、結果としてその行為者が幸せになれさえすれば、目に見える成果はことさらに出さなくても良いのだが、ジョブズの場合「ヒッピーの結果純化された脳で思いついたことを形にしたい」と言う、そう言う形の幸せを願っていたようで、それが従来のボタンや命令文字入力に依らない、つまりデジタル行為に依らない、アナログなクリックやワンタッチによる作動方式の発明に繋がっていった。これらの行為に書道の、更には禅の悟りの面影を感じるのは私だけであろうか。

こういうアナログな方式は東洋人の我々にとっては、いずれは登場して当たり前の方式に見える。我々日本人はむしろ、その技術的可能性の方を見通せないのである。だがデジタル文化が当たり前の欧米人にはこれらの気付きは相当の感動物であったようで、ヒッピー現象と似て特定の愛好者に熱狂的に受け入れられた。発売後しばらくマック愛好者であることは、ちょっと異色な進歩人のステータスの感を有していた。

こうして、その天才肌とキリスト教的行儀を軽んじた変人的行動でその後も浮沈は大きかったものの、最終的に彼は「聖人」に列せられて惜しまれつつこの世を去って行った。

現在、欧米はもとより日本等東洋でも「ジョブズ偉人説」には根強いものがあるが、果たしてジョブズはそこまで天才だったのだろうか。デジタルコンピュータの発明はともかく、川の流れのようにあるいは書道の草書体のように手かざしで物事を運ぶのが一番美しいと言う発想は、美しい自然に囲まれた農耕民族の日本人の我々にとってはむしろ当たり前ではないか。

欧米人であるジョブズがキリスト流の伝統的規範に満足せずにヒッピーに真実を見出した慧眼は、あたかもキリスト教の制限の中ではぎりぎり火あぶりの直前まで神秘主義を極めたヤーコブ・ベーム程度の勇気を感じさせはするが、ベーム程度の神秘家は日本には山ほどいる。彼が偉大だとすればその偉大さはむしろ、手かざしの気付きと言うよりは、その手かざしのアイデアをシステム化した欧米人特有の組織力と行動力にあったのではないか。その意味で私にはジョブズ氏はむしろ、最近良く見かける「日本ファンのシステムの欧米人」の一人に見えるのである。

ただ、彼をきっかけに、本来の意味でのヒッピー運動を再評価する動きがあっても良いのではないかと思う。ヒッピーのことを「反体制的」と記述するところが多いが、本来のヒッピーは一切の縛りを拒否した「非体制的」と記述すべきである。アナーキズムと似た所はあるが、主義や信仰ではないので伝道や強制はない。義務も責任もない。資格もない。強いて言えば「反ロボット願望」と言うところか。

9、二分法は愚かか？

世の中に「二分法」と言う思考方法がある。何でも2つに分けて、「お前はどっちだ」と問う方法だ。大学等の授業では「二分法は愚か者の思考法」と教授するが、たしかにそう言う面もある。「お前は俺が好きか嫌いかどっちか言え」みたいな単純すぎる発想法だからだ。

二分法で世界に最も害毒を垂れ流したのはおそらく、文化大革命や紅衛兵運動のきっかけとなった、極端な毛沢東主義であろう。「都会は悪、田舎は善」「知識は悪、朴直は善」「工業は悪、農業は善」と言った極端な二分法で毛沢東は自己保身のために国内を混乱させ、多数の人命を奪った。この主義は不幸なことにその後衰えるどころ

瞑想録（その2）

か世界中に広がった。ペルーの日本大使館襲撃事件を起こしたセンデロ・ルミノソもこの影響を受けている。

では、明らかに危険を孕んだ二分法がなぜいつまでも消えないのか。それはやはり分かりやすく明快で、人の頭の構造に合致しているからだ。人は特に思考の端緒において、まずデジタルな二分法で物を考え始める。二分法の危険が生じるのは、実はこの端緒の段階で留まってしまい、更に思考を深めることを麻痺させるからだ。物事の本質がアナログであることが忘れられている。

実際、二分法が常に邪悪だとまでは言い切れない。例えば、「欧米人は狩猟民族で個人主義、東洋人は農耕民族で集団主義」と言うことは良く言われる。専門家にすればこれはあまりにも単純化した紋切り型の理解なのであろうが、一般人にとっては大変わかりやすいし、蓋然的に正しいと思える。あるいは「日本における稲作は弥生時代に始まった」、最近はこれを覆す説も出てきているようだが、大筋こういう理解が通常だろう。やはり理解は二分法から始まるのだ。

さて、また二分法になるが、学問は大きく、自然科学と人文科学に分けられる。そして同じ人が営む科学でありながら、自然科学は統一理論を目指し、社会科学は多様化を目指しているように見える。これらの方向は逆である。なぜこうなるのか。一件別に見えることが大元では同じ原理であると言う発見は、物の理解と応用に偉大である。例えば静電気と雷が同じ電磁気であることに気付くと気づかないでは、物の見方や工業製品化は大違いだ。

ではなぜ人文科学では統一理論を目指さないのか。先の例であればせっかく「稲作は弥生時代から」で落ち着いているものを、「わざわざ反例を見出すのが人文科学者の醍醐味」にすら見える。もちろん人文科学にも統一理解を目指そうと言う動きはある。例えば2つの世界大戦から共通要因を掘り出して反省のより強い材料にしようと言う考え方だ。ところが逆にこの例でもわかるように、人文科学に「全く平行な2事象」などありえないのだ。万物には必ず違いがある、これが人文科学なのだ。だから人文書は一般に分厚い。そしてどこに本質や言いたいことがあるのか分かりにくい。原理原則よりも枝葉末節の違いの方がしばしば意味を持つほどなのだ。

再び二分法になってしまうが、物事には「量と質」の2面がある。量は数字で表現できる性質、質は数字で表現できない性質である。そして大きく言えば、自然科学は量（数）の科学であり、人文科学は質の科学である。数はそもそも質の情報をバツサリ切り落とした、言わば仮想の純化物であるから、それを更に集計・統計して情報を集約

しようと言う方向は自然になり、これが統一理論へ繋がっていく。これに対して人文科学は雑多で多様な質の情報を取り扱うので、集約化よりも思想の嬖の方が大きな意味を持つてくる。

だから、本題のテーマであった「二分法の功罪」に戻るならば、実は自然科学も嬖に注目し、他方人文科学も統一的面により注目すると言う歩み寄りの努力が、自然な人の知識の宝としてはより重要なのではないだろうか。二分法のデジタルから始めても、本当の究極の姿はアナログにある、しかも数字はおろか言葉にもならない所に本質や悟りがあると言う謙虚な心構えが、イデオロギーと言う表面理屈の一辺倒の不幸を取り除き、この世の誤解と紛争を大きく減らすための、最大に重要な謙虚さではないかと思うのである。もちろんいたずらな単純化もまた無意味な重箱つつきも、どちらも同じくらいの極端であり愚かである。

10、判断の構造

我々は判断の継続で日々をこなしている。ここで判断とは、選択する1の選択肢を除いて残り全ての選択肢を捨て去る行為である。私は今たまたまPCに向かっているが、コーヒーを入れると言う選択を無意識に後回しにしている。

ここで考えてみるに、PCを操作すると言う選択肢と、コーヒーを入れると言う選択肢はまるで違っていて、およそ比較する余地がないほどだ。それにも拘らず比較考量したからこそ今私はPCに向かっている。誰もがそれこそ毎秒ごとに、こういう荒唐無稽で強引な選択をこなしているのである。

この強引な比較はどういう論理で行っているのか。簡単のために今は「湯豆腐にしようか冷や奴にしようか」と迷っているとす。下らない判断であるし、答えは人によりその時の気分により変わってくるだろう。だから選択は蓋然ではあるが、しかもどちらも豆腐の小料理と言う類似度の高い間の選択であるが、にも拘らず厳密には(論理的には)甲乙つけがたい。非順序なのだ。

湯豆腐には昆布だしを使い辛子で食べる。他方冷や奴にはネギとミョウガを載せて胡麻醤油で食べる。辛子とネギ、昆布と胡麻、これらは選択物の付属品に過ぎないが、しかし厳密には質的原理的に全く異なる比較不能な物同士だ。だが、ここで本気で厳密をやっていると、早晚飢え死にしてしまう。

瞑想録（その2）

つまり我々人類は、理屈や論理を越えて選択するという極めて強引かつ柔軟な能力を、ありがたくも持ち合わせているということだ。決して全順序ではなく、むしろ連続的に多様な様々の性質群から、何らかの総合判断で甲乙と言う順序を一瞬で難なく付けてしまう、これはものすごい能力であり、しかもまだ誰も定式化していない。実は犬でもやるが。

ちなみにその選択をした理由を聞いてみると、「今日は暑いから」とか「湯豆腐は久しぶりだから」とか「何となく」とか色々な答えは返って来て、おそらくそれらは主要な理由の一つなのではあろうが、決してすべてを語ってはいない。そもそも心の襞にある物など到底語りつくせないのだ。それにも拘らずその答えを聞いた方も「ああ、そう言うことね」などと納得したりする。果たして両者の理解は本物だろうか。一人で相撲の滑稽ではないのか。

この「順序が付かない物同士に順序を付ける」と言う行為、少なくとも言葉にする前の本人は、言葉そのものよりよっぽど深く広く理解している。例えば先日の心持と比較して、「今朝たまたまTVで冷や奴を見たよな」とか思っていたりする。つまりこの人のこの場合にとっては今朝の時点が原点になって、心の襞の測定の定位置になっているのだ。だからちょっとした差異を感じることができる。ちょっと過ぎて言葉には表せないような差異だが。こんな差異が人の心の中に実は無限にある。

心の中や世の中は連続体で出来ているところ、言葉や表現や数量は全てぶつ切りのデジタルだ。そこには無限と有限と言う大きな越せない溝がある。この溝を無視して強引に言葉で語ろうとするからもどかしいのだ。「言葉にすれば嘘に染まる」のである。だがそうかと言って連続な物を連続のまま置いておくのも、芸術としてはありかもしれないし、こういう微妙なところを読み切るのが予言者の超能力かもしれないが、普通の人には現実的でない。どこかで割り切りが必要だ。

そしてこの割り切りこそが選択と言う奇跡的行為の本質なのだ。割り切りと総合化によって人は選択をしており、その本質は「質についての半定量化」とでも言おうか、心の中でインパクトを測定しているのだ。全くの定量化でないから数値では表されないが、順序は付けられ、大ざっぱな間隔も付けられる。「ダントツでこれ」であったり「迷うけどこっち」であったりする。この「ダントツ」や「迷うけど」の表現する更に前の心の中での微妙な感性、これが全ての根っこにある。

この感性、感じたままを脳波等で直接伝達できれば、人の伝達は遥かに円滑になるだろうが、残念なことに今の人類にこの能力はない。そこで唇が寒いと知りつつも言

瞑想録（その2）

葉で伝えるのだ。そして「ダントツ」や「迷うけど」と言った言葉の近似、これは修飾語を増やすことによって、例えば「一瞬ちょっと迷ったけど」とか、「昨日の醤油かソースかの時よりよっぽどダントツだけど」とかでより精度を上げられるが、依然として外からの近似なのだ。

心の贅を知るには内から内観しないと限度があり、形式論に陥る。例えば「痛い」の一言にも、ズキズキ痛い、指先が痛い、痒いようで痛い等々、「痛い」連続体の内部に無限個の分布がある。それ以前に痛いとかかゆいとか言う前の素の感覚は、茫洋とした大海の一滴のようだ。その素直な感覚に帰るのが禅の悟りでありアニミズムの心である。

その素の感覚に敢えてラベルを付けるとして、そのラベルは「アナログ数字」に相当するであろうし、それらの比較考量は「アナログ演算」と言うべきだろう。どんな数字でもまた演算でも良いが、その本質は連続体に対する割り切り、割り切り過ぎてしまえば二分法に陥ると言う危険を承知の上での割り切りだ。割り切り自体も演算である。

従来の数字と大きく違うところは、アナログ数字の場合演算の結果が本質的に表現不可能なところに落ちると言う意味で、閉じていないことだ。無理やりに閉じさせるから一神教やイデオロギーのような不自然な非人間性に陥る。その意味でアナログ数字や演算は、心の中にあるときだけ真実の、本質的に文字が立たない、密教的な物と言うことができる。閉じていない世界で演算に演算を重ねると、もはや表現不可能な境地に至る。それで良いと思う。

悟りの境地もそもそも表現不可能な境地なのだ。だからこそその境地、厳密には「境地の当たり」だが、それに「悟り」と言うラベル、アナログ数字を新たに発明して張り付けたのだ。こういうラベルの発明と貼り付けの繰り返し、新世界の整理の仕方で、最近では計算機の進歩により、IT関係で良く見られる。演算を整理体系化したのがプログラム言語であり、その整理の程度により、「より単純な言語は粗い代わりに理解しやすい」と言う一般的なトレードオフになっており、整理行為が別の面からは情報切り捨てによる割り切りであるところは代数学の仮想性と類似している。

もちろん従来の数字や加減乗除演算もこう言った整理体系化の一つの形ではあるのだが、ITや歩きや泳ぎと言った現実行為の体系化の方が、現実を引きずっている分だけ演算も多種多様で一貫性の面からは低くなってしまう。数学者の間に「計算機落ち」と言う軽蔑用語もあるほどだ。ただ、アナログ数字の方が表現は豊かで味わい深いと思う。この味わい深さをある程度残したままでもっと整合性ある演算体系を見出

す、これが次の仕事である。キーワードは蓋然、分かりやすく言えば切り捨てと割り切りといい加減だ。それと多値性。演算の結果が単一であると言うのも、単純化に過ぎていて面白くない。

11、体系外に出る

最近の計算機言語やMSオフィスのツールは、非常に良く出来ていて感心する。良く使う機能のみを厳選して、かつそれらが使いやすいように痒い所にまで手が届くような、心にくい構成となっている。

オフィスのうちワードは、文章を作ると言う行為が極めて日常茶飯事でありかつビジネスの基礎だから、出現するのは当然として、ちょっと驚くのはエクセルと言う表ソフトの充実ぶりだ。表を作ると言う行為がその周辺にこれだけ多様な機能を侍らせているとは、エクセルを使って初めて知った。

表を作ると言うことは、形の整え及び行ごと及び列ごとの属性の一致と言う代数的な拘束があるのだから、その拘束を乗り越えるだけの価値がなければエクセルの存在価値は無いわけだが、現実には十分乗り越えている。

人員管理、在庫管理、会計処理等の低レベルだけれども日々誰でも必要なことから始まって、統計学や行列演算、果ては微積分や基礎的なプログラミングまで、実にこれら多様なことすべてが、表形式と言うちょっとした形式を容認するだけで十分に可能なのだ。更に表示法についても、種々のビジュアル化ツールがワンクリックで選べる形になっている。

更に進んでマクロというコマンド統合方式まで用意され、かつこれにはVBAと言う簡易なプログラム言語まで用意されていて、環境設定なしにかなりのプログラムまで書ける、一種のプラットフォームにまでなっているのだ。表から始まってここまで来ている。まもなくあらゆる表計算と数値解析が、「マクロC言語」的な形を取って、それこそ作曲や作画等の創造的な芸術活動に至るまで、エクセルシートで出来るようになるだろう。

世の中には創造的な仕事として、大きく分けて「発明」と「発見」がある。簡単に言えば見つけるのが発見、作るのが発明である。そして特に発明にはひらめきが必要だ。近い将来エクセルが発明や発見をするに至るだろうか？出来るならばエクセルが人工知能を越えることになる。

エクセルが発見の手助けをすることはあるだろう。好例が最近流行りのビッグデータ解析だ。そもそも統計学が、膨大な数体系から代表するいくつかの指標を抽出する行為であるから、これの延長でエクセルによる集計が、それまで膨大すぎて人が気付かなかったような特徴を切り出してくれると言うことはあるだろう。一種の数値発見である。ただし、ここで発見するのはあくまでもそれら切り出された数値や指標を読む人間のアナログ的能力であり、エクセル自身が何かを発見するわけではない。

では発明はどうか。これはなおのこと不可能だろう。発明の素朴な形はひらめきであり、本当のひらめきとは、それまでに用意された土俵から飛び出ることによってなされるものであるところ、エクセルだろうが既存のいかなるプログラム言語であろうが、あくまでも「点から点への」演算あるいは写像行為であり、行き先が点である以上はたとえどれだけ広く用意されていたとしても、その予定された土俵の系外に出ることなど、論理的に不可能なのだ。

逆にもし演算が系内で閉じていなかったら、そのツールなりプログラム言語なりは不完全と言うことになるのだ。閉じていると言うことはそれほどに現代科学の基本中の基本である。もし閉じていなければ、それは学問でも神学でも主義でもない。ただの思いつきや感想やたわごとなのだ。現代社会はそう言う暗黙の約束事の上に成り立っている。どうりで窮屈この上ない。

ではそう言う暗黙ルールを強制されている人類がなぜひらめきや発明が出来るのだろうか。この質問は実は現代社会においてはタブーである。あたかも「産めよ、増やせよ」とラッパを吹く割にそのお産の基礎であるセックスについてはタブーとなっているキリスト教倫理と同じくらいに、不思議なタブーなのだ。

なぜひらめきの構造がタブーかと言うと、ひらめきと言う行為が科学の外にあるからだ。ひらめきを正面から取り扱うと、科学が全能でないことを認めることになってしまい、現代社会の秩序を破壊して「何でもあり」状態、カオスになってしまう、少なくともそう信じられているからだ。

ひらめきは無から有を生み出す能力であるところ、点論理のみであるプログラムやオフィスツールや科学にとっては「はみ出し」と言う論理の飛躍は直ちに異端である。点の世界はあくまでも当たり前の物しか見いだせない、生み出せない宿命にあり、当たり前でない説明のつかない物を生み出したとしたら、それはサタンの仕業なのだ。

だがここで敢えて厳密を辞めてみよう。少なくとも少し緩めてみよう。多少の論理の飛躍はあっても、そこを論理の代わりに経験や健全な感性で繋げれば良いとしてみよう。ちなみにこっちの方がよっぽど我々人間が普段取っている、現実的な思考様式だ。

こういう立場に立つと言うことは、論理や演算や写像を「点から点へ」ではなく、もっとゆったりした「連続体から連続体へ」とすること、つまり世の中の基本は点ではなく連続体であると言う立場に立って蓋然論理を適用することに当たる。写像先が連続体ならば像はその連続体内を自由に移動することが出来、その結果従来の用意された土俵の外に出ることが出来て、ひらめきや発見に至れると言う順序になる。

私は以前に、スタバのタンブラーの壁紙が詰まってしまった際の取り除く方法の気付きの過程を記した（記事3）。小さな気付きではあるが、小さい気付きであるがゆえに、気づきの本質が良く見えると思ったからである。

私は最初、その壁紙の詰まったタンブラーを揺すってみたり、あるいは多方面から眺めてみたりした。しかる後にしばしの間瞑想した。問題からいったん離れて、先入観を取り除き、心を自由に開放して、心の自由度の高い、より素朴な位置に置いたのだ。おそらく頭の中ではシナプスが様々な形でつながったり離れたりを繰り返していたことだろう。そうするうちに天から答えが降って来たという訳だ。

振ったり見たりはあるいは人工知能でも出来るようになるかもしれない。だが心を解き放ち瞑想すると言う行為は、少なくとも現行の点型計算機では無理であろう。用意された土俵から離陸することが出来ないのだから。

12、見える化と Think different

「見える化」と言う日本語がある。あると言っても勝手に使われているだけで、「動詞＋化」とか「助動詞＋化」と言うのはおそらく文法間違いだろう。“Visualize”の訳のつもりであろうが、だったら「可視化」と言うべきだ。

ところが会社の、特に現場主義でたたき上げの間では、ことさらに「見える化」と言うコトバが使われる。「ボイラーのどこが問題か見える化をしなさい」と言った具合だ。この手の現場主義のおっさん達の決まり文句が「3現主義」つまり「現場、現物、現状」だ。だから「見える化」は「ドブさらいをしろ」とか「肥ダメをくみ取れ」位に下品だが、まさにこう言った文脈で見える化という言葉が使われる。

瞑想録（その2）

要するに「見える化」、これは単なる「可視化」ではなく、「どっと下品にやれ」と言う含蓄を、さも「下品＝本物の物造り＝立派な行い」とでも言った図式で、意図的に文法を犯すことによってギラギラと下品を流しこんだ言葉なのだ。見えることよりも下品であることの方が重要だと強制する局面で使われる。そして現場はこの手のおっさんの巣窟だ。

似たような言葉に「初期化」がある。CDなどにデータを入れる前に「畝を作る」行為だ。「初期」は一応名詞ではあるが、「時期＋化」と言うのも今一すっきり来ない。“Initialize”の翻訳であろうが、だったら「可記化」とでも訳すべきだっただろう。

では、この手の「文法犯し」は日本語だけかと言うとそうでもない。アップル創始者のスティーブ・ジョブズ氏は講演で、自らの座右銘を問われて“Think different”と言った。「人のやらないことをやれ」と言う訳だ。実はこれも文法犯しであって、“Think differently”が正しい。だがこう直してしまうと変におとなしく口先だけになってしまう。敢えて文法犯しをすることでジョブズ氏は口だけでなく態度でもダイナミックに、「違う化をなさい」と言ったのである。

ご存知のようにジョブズ氏は元ヒッピーで、禅もすれば書道もした。そもそも我の塊の欧米人にこういう非キリスト教的な指導をすると、そのほとんどが単にタガが外れて、エゴ丸出しになったり他人を差別したりに走るのだが、そこはジョブズ氏、目出度くも悟りに至って、その彼なりの悟りの表現が“Think different”だったのである。実際悟りとは、矛盾の許容的受け入れでもある。

ではなぜジョブズ氏の「違う化」は悟りで、現場のおっさんの「見える化」は正反対の貶めなのだろうか。少なくとも形式的には違わないから、そこには意味的実体的違いがあると言うべきだろう。「違う化」、これは従来の縛りの外に飛躍して物が新しく見えることを言う。新しい気付きは知性にとっては喜びだ。そしてそもそも人は喜びを究極の目的として生きている。他方見える化はその逆で限りない貶め、地縛霊のように地を這わせる自由剥奪の奴隷化行為なのである。

ジョブズ氏はマックやスマホの基礎を作って世の中を革新し、自らも大儲けをした。まあ米国流に言えば大の成功者である。そしてこの事実を根拠にジョブズ氏を神格化するファンが世界中に山ほどいるが、彼が最も賞されるべきは、欧米人でありながら「違う化」と言う形で目出度くも悟りに至った点である。彼の悟り“Think different”は、高名な白隠禅師の「○」（トップの画像）程に深い悟りに至っているのだ。

最後にこの悟りの視点から改めて“Think different”を観ると、彼は「常に体系外に出よ」と促していることが分かる。実際体系外に出て新しい視点から物事を俯瞰すると、それまでの全てがまるで異なって見えて、新しい発見に至れる王道になるのだ。学問はとにかく発見には王道がある。そして発見の王道こそが悟りなのだ。だから気の効いた日本人は皆参禅する。さあ、今こそ理屈を外して体系外に出よう。

13、動詞の活用的体系

大抵の言語で動詞の活用は、「少数の使用頻度の高い動詞の不規則活用＋大多数の頻度が低い動詞の規則的活用」で成っている。これはなぜであろうか。特になぜ不規則動詞が存在しているのであろうか。

分かりやすさや習得のしやすさから言えば、「動詞は例外なく規則変化」の方がよっぽどシステマ的である。実際不規則変化を見るとそのほとんどが、歴史的経緯はともかく、例えば「発音しやすいから」と言ったような必然すら感じられず、むしろ単に記憶の労を要求しているだけだ。理系人間には不要な不条理に見えるだろう。

ところが別の見方もある。動詞の活用と言っても、それら動詞の意味や使用状況は質的に千差万別だ。この観点からは動詞の活用は、全部違っている方がむしろ自然に見える。つまり揃い過ぎているのも何か人工っぽいのだ。

結局これら2つの作用の言わば妥協点として、「頻度の高い動詞は記憶する価値があるので不規則変化、頻度の低い動詞は全部まとめて規則変化」と言う形で落ち着いている。これが真相である。

これは結晶に例えればあたかも、「粒径の大きい小数の粒子は単独で、粒径の小さい多数の無名の粒子はまとまって」結晶化しているようなものだ。このように結晶に例えてみると、動詞の現状は自然に見えるだろう。

不規則動詞自体はエネルギーを増やしているが、揃い過ぎていてもエントロピーが小さすぎて、そのためには別途エネルギーを要する。放っておけば白黒混じり合いの基石を白と黒に分けるのには労力を要するのと同じです。総じてつまりこれは、「言語学における最小作用の原理」と言って良いのである。

瞑想録（その2）

最小作用の原理とは、「あらゆる物理はトータルエネルギーが最小になるような現れ方を自ら取っている」と言う原理で、光の屈折も、衛星の楕円軌道も、更には量子力学の波動関数の重ね合わせまで、すべて最小作用の原理に従っている。

とするならば今回見た動詞の不規則変化も、実は「言語学の最小作用の原理」であって、むしろ不規則な物がいくつかある方が自然なのである。このような言語学の最小作用の原理にどうやったらラグランジアンやハミルトニアンが定義できるのか、それはまたどのような数体系と演算によってか、これらは別途考える価値のある問題なのですが、今は動詞の活用で現行の数体系や演算体系を照らしてみましよう。

数と演算の体系、これはおなじみの実数上の四則演算でも、あるいは今後見出されるのであろう未知の体系でも良いのですが、「例外なく $+$ $-$ \times \div のみ」で「全ての演算は実数全部に適用可能」です。でも不規則動詞に照らせば、「それ以外の例外的な演算があって、それら例外的な演算は数体系全部ではなくその一部のみに作用する」と言う形を取った方が、不揃いかもしれないがより人間的で現実的で物理的だと言うことになります。

つまり例外的な不規則もある「より現実的な体系」から見ると、現行の四則演算は、あたかも白黒の基石が普通ばらばらに混じり合っているのになぜか整然と分けられているような、人工的仮想的な体系だと言うことになるわけです。実際数と言う物は、現象から質的情報を全部捨て去った、極めて仮想的な存在ですね。

更に言えば、上述した「自然化」当たりから、連続体あるいはアナログ的波動が、何らかの形を持って見えてくる、そのきっかけになりそうな気もしている訳です。

そしてこの気づきに至って、私は自分が学生の頃に数学や物理やプログラミングに漠然と感じていた物足りなさや窮屈さの、その所在が分かりました。これらはいずれも「出来過ぎていて」、全部がんじがらめでその体系の外に出るすべがない。結局内にこもって「重箱の隅をつつく」しかないような極めて精神衛生が悪いようなものだったのです。あるいはタコが自分の足を食って生き延びているような自慰行為です。

一言で言って、遊びが無さ過ぎるのですよ。ホラも吹けない世界なんて「当たり前以外は証明や発見をするな」と言われているようなものです。キリスト教の教理のように息が詰まります。ここ何回か書いていますが、私は用意され許可された人工的な地平から飛び出して、空高く飛翔したいです。

14、観想に係る演算

先日、「人は、本来比較不可能な物を瞬時に比較考量できるという極めて優れた能力を持っている（犬にもあるが）」と指摘したが、ここの所をもう少し考えてみよう。

例えば今あなたは、「映画を見に行くかそれとも昼寝をするか」で迷っているとする。映画と昼寝、これらは内容も効用も全く異質なのだが、人はそれでも選択できる。まあ、それらの本質をぶっつけで比較していると言うよりは、一定の物差しを持ってきて、それにほぼ沿った方向や面での比較をしているのだろう。これならばなんとかできそうだ。

こういう選択に係る選好の指標に、経済学では「効用関数」という概念がある。選択すべきそれをするにより、経済の目標である利益が、どれだけ高まるかを示す「関数」である。ここで目標である利益は金銭で数値評価できる建前なので「関数」と付けたのであろう。

ただし関数と言っても、常に一意に決まり再現性もあるような厳密な意味での関数ではなく、もっと素朴に指標のようなものであることは経済学も認めている。しかし現実の金融工学では、「工学」と有ることから言い訳できるように、適当な関数形を仮定してしまう場合が多い。しかも汎用的な関数は数が限られているので、登場するのはせいぜい三角関数と指数対数関数くらいで、その幼稚さは数値流体力学の乱流モデル並みであり、これをもって何をか言おうかである。

ただ、この経済学の例よろしく、全く異質でかつ多面的で比較のための取り付くシマのおよそない両者について、その多面のうちから敢えて現状の目標に合致する「目標指標」（通常は満足度）に注目すれば、その両者の目標指標を互いに擦り合わせるにより、半定量的な比較もできようと言うものである。

その比較は比較対象の多面性を反映してやはり依然として多面的であって、「映画の方が面白いが寝る方も楽だし（比較）」とか、「映画は明日もやっていてしかも彼女と行けるかも（相乗効果）」等々色々優劣が付くのであるが、それらの優劣の重さを総合評価して、人は選択肢を選ぶ。そしてその選択は、時に後悔することもあるがまあ当たると言う意味で、再現性がない蓋然的な行為である。つまり科学でない。

そしてこの、多面的比較と総合化と言う2つの行為を突き詰めると、結局は①加減演算と、②類似比較演算に、総合されることが見えてくる。

ただしここで加減演算と言っても、蓋然論理の場合は2つの要素を加えることが、単なる単純和ではなく相互作用も発生し、しかも相互作用の方がよっぽど大きいこともしばしばであることに留意する必要がある。

また、類似比較演算は類似な部分同士を擦り合わせて、似ている・似ていないを判定し、もし似ていれば、つまり比較できる場合に限って、どっちがどれだけ優れているかを半定量的に心の中で見極めるもので、言葉にすれば「ちょっとまし」「かなり良い」「ダントツに良い」などまあ色々あろうが、これだけ見てもこれらの優劣比較が単なる順序尺度を越えて、半間隔的になっていることが分かる。特に言葉にする前の心の中ではなおのこと定量性が強くなることが分かる。

ただしここで注意すべきは、「順序尺度を越えて半定量的」と言っても、そもそも多面的な比較の結果が直線の上を一系列に乗っているわけではなく、むしろ千鳥足状なのだ。これでも全く比較不可能な時点よりはかなり比較できている。

そしてこうした千鳥足同士の「足し合わせ」と「類似比較」、これらがあたかも現行の数体系の加法と乗法に対応する役割を果たして、心の中の演算は働いているように見える。もちろんこのような演算にかかる「数値」は、現行の実数体系とは異なる筈だ。一系列に並んでもいなければ、常に演算に関して閉じている必要もないのだから。

そして最も大切なところは、最終結果が出るまで出来るだけ言葉にしないこと。連続体と言うアナログに対して言葉と言うデジタルは高々測度零なので、陽に言葉にしてしまうと情報を大きく滅失させてしまうからだ。

言葉にすると特にその感動や共鳴が大きく滅失してしまう内的世界、内観にかかる演算であるが、なぜか客観化とまではいかないまでも、説明のためにそれを言語化した表面的な言葉以上に伝達できていると言う現実もある。これがなければやりとりはほとんど形式論理になってしまうだろう。

ではどうやってやりとりが、形式論理を越える深い理解をすることが出来るのだろうか。それは第1に言葉以外の動作や態度等の雰囲気による伝達があること、第2に人の五感と言う受ける方の側の無限個連続個のセンサーの存在、そして第3に人としての常識とか共通の経験が根底にあるだろう。

ところで演算を基本的に言葉によらず内観で行うとした場合に、その結果に関する情報の要約はどうやるのだろうか。従来の数体系ならば統計手法で主要な情報のみに濃縮できるのであるが、内観情報の濃縮の仕方は如何。忙しかつ多様な現代社会において情報濃縮は重要な課題であり、特に内観演算の場合は個々ばらばらの結果を言語化するよりも、濃縮結果を言語化した方が情報減失は少ないと考えられるのだ。

ここで例として電子地図を挙げてみる。これの尺度変換は単なる縮小拡大ではなくむしろ情報の追加削除であり、しかも目的に応じてどういう情報を追加削除するかがまるで異なってくる。主観も入るだろう。外の世界を表す地図でさえ既に現行の数体系や演算や情報理論に従っていないのだから、内観にかかる情報集約はなおのことである。

ここで参考になるのが文学等芸術における情報圧縮である。例えば「源氏物語を5分で分からせる」という設定の場合、①あらすじを淡々と語る、②光源氏の出来事をかいつまむ、③如何にも雅なエピソードを1つ詳しく提示する、等色々ありえる。つまり内観演算の情報圧縮は一通りでないのだ。

当然に主観も入るし、目的や相手の知識分布によって説明の仕方も異なってくる。仮に「情報量」が定義できるとして、そこでの情報操作はチューリングマシンのようにただ黙々と「0, 1」を吐き出すのではなく、少なくとも「始め、終わり」と言ったメリハリはあるだろう。

質の比較とはそもそもそういう異質で多様なものであり、今はその中からあえて演算を抽出すると言う探索を行っている最中である。その基本的態度は、「いい加減」である。

15、あだ名考

あだ名、特に学生の頃は良くつけるもので、その気付きにはハッとさせる、あるいは思わず吹き出してしまうような面白さがあり、従ってひらめきの典型例である。ここでひらめきの構造を見るために、あだ名と言う表象に注目してみよう。

あだ名で特に注意喚起したいのは、いわゆる「あだ名名人」とも呼ぶべき天才たちが居るのだが、彼らが学校の成績が良い訳でも何でもない、相関が全くない点だ。

瞑想録（その2）

あだ名と言っても薬丸さんを「やっくん」と呼ぶような工夫のないものは、今回の対象外とし、工夫が見られる物、中でもいじめにならない程度の多少のとげのある風刺を対象としたい。

その数は実に無限にあるだろうし、その面白さも本人を見ないと分からない物も多いのだが、敢えていくつか挙げてみる。なお、これらの列挙はあくまでもひらめきに関する考察が目的であり、特定人物の中傷ではありません。

まず、本物を見たことがあると言うことで、有名人、芸能人から、

- ・キンタローは「食パンマン」：顔が四角で大きかったのだ。
- ・壇蜜は「愛人」：若いころから色気があったのだ。
- ・原子力委員会の班目（まだらめ）委員長が「デタラメハルキ」。
- ・みのもんたが「モノミンタ」。
- ・小朝が「金髪豚野郎」（海老名泰葉が言った）。
- ・西山英彦（原子力報道官）が「西：やん」「カメレオン」。
- ・小保方晴子が「オボッシー」。フナッシーの乗り。
- ・松平定知アナが「殿」。松平だから。

これらなんか特徴（の一面）をよくあらわしている。ひらめきだね。

次に自分の周りからのネタで、まず先生から

- ・シェー：赤塚不二夫の漫画から、キザったらしい教師。
- ・バカボンパパ：同上、バカ顔で頓珍漢な教師。
- ・頼虎（よりとら）：家老の家柄だが虎の巻ばかり朗読する教師。
- ・ジョニー：外人（ヒスパニック）が混じった顔つきの教師。
- ・キムさん（女性）：丸くて平たい顔で容赦ない教師、金正日。
- ・ハエ女：しつこいだけのブスな女教師。
- ・猿の惑星（女性）：キャラそっくりで色気のない体育教師。

続いて元友人や知り合い関係から、

- ・ゴリ子（女の子）：黒くて出歯でゴリラ顔だったから。
- ・白ブタ・黒ブタ：柔らか太りの女の子2人。
- ・タラ野郎：顔が魚に似ていて、たらたらしているから。
- ・ムードンコ：近藤が本名。逆読み。
- ・エイトマン：元はヒーローだが、テストで8点しか取れない奴。
- ・エビス：元は蛭子能収、見てくれから態度からまるで用務員。
- ・花王石鹸：顎がしゃくり出していた。

瞑想録（その2）

- ・馬崎:本名は浜崎だが、顔が長かった。
- ・ドラム缶(女の子):寸胴に太っていた。
- ・ゴルゴ:崩れた高倉健みたいな「渋さ」があった。
- ・モアイ(女性):3頭身のオバサン。
- ・ゴツツアン(女性):関取並みの体型。
- ・腐乱軒:フランケンシュタインのような悪い顔。
- ・シナビタン:リポビタンばかり飲んでいたがしなびた野郎。
- ・クシャおばさん(女子):クシャおじさんに似ていた(美人)。
- ・サミー・ディビス:黒くてゴリラっぽいあの感じ。

更に続いて他人やサイトから得た情報から、

- ・朝青龍(女の子):太り方がそっくり。
- ・さんま:元は明石家さんま、出歯で笑ってばかり。
- ・寅さん:山高帽をかぶって態度もそっくり。
- ・ミツウラ:光浦靖子にそっくりのブス。
- ・アルトマン:結婚相談所でしか結婚できなかった。
- ・一茂:苗字は長嶋だが球を落としてばかりいた。
- ・ヤマネ:アンガールズの山根みたいに骨のない奴。
- ・シンゴ:香取慎吾ではなく柳沢慎吾、出歯で不細工。
- ・ヒムラー:バナナマンの日村にそっくり。
- ・オデーブツサマ:鎌倉大仏そっくり。
- ・山桜(やまざくら):花(鼻)より葉(歯)が先に出ている、出歯。
- ・タコヨ:本名は横田だが、本当にタコっぽい。
- ・ゴーリキー:剛力彩芽に似ているのだって、かわいそう。
- ・チツ(男):本名は土田。
- ・シレマサ(痴正):本名は知正(トモマサ)。
- ・マンマ:生まれたのまんまの体型のおじさん。
- ・チンナム:葬式のように陰気臭かったから。
- ・ポッポ(女性):鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた。
- ・童貞:すぐに「どうてー(どうだよ)」と聞くから。
- ・オリバー君:そう言う類人猿が居た。
- ・ノック:ハゲと下品さが横山ノックにそっくり。
- ・連休:一休でなく、いつも休んでいるから。

こうして見てきますと、ひらめきとしては第1に顔の特徴、第2に身体の特徴、第3に性格の特徴を、完全一致ではないものの、デフォルメ画のように器用に表していて、しか

もそれが定着すると言うことは、多くの人々が共通に納得する（共鳴する）ことを示しています。しかもあだ名はそれ自体が笑えるように工夫（変形）がなされています。こういうことを一目でひらめくアナログ脳、すごいですね。

地アタマは英語や数学よりも、こういう気付きで評価されるべきだと思います。先日の記事で観想、内観に係るアナログ演算子して、①アナログ和と②類似比較を挙げましたが、そもそもそれに先立って、それら複数を足せる、あるいは比較できると気付く能力、それ以前に複数の選択肢を想到する能力、更にそれ以前により優れた第3の選択肢に思い至る能力の構造を知るべきであると言うことが分かります。

やっぱり一言で言うと、ふっと浮かぶと言うことでしょうか、もしその裏に膨大なデータを抱えているとしたら、今の検索サイトと余り変わらないですね。だからここはベースデータの大きさと言うよりも直観力と言うべきでしょうか、問題はその直観力がどこからきているかです。一種の特徴抽出でしょうか、デジタルにやっているとは思えません。ハエやハチでも出来ることが分かっています。一種の形状認識です。何らかの連想力も関係していることでしょう。

これが蓋然能力である証拠に、たとえ名人であっても、誰に対してでも気が効いたあだ名をすぐに付けられる訳ではありませんし、同じ人物に複数個のあだ名が浮かぶこともあるわけです。瞬間芸で、少し経つと忘れてしまい、二度と思いだしません。③形状認識、これも一種の演算ですね。

16、第三の道

このブログで最近何回か、「不可能な選択の奇跡」を取り上げてきた。それは「湯豆腐にするか冷や奴にするか」であったり、「映画を見に行くかそれとも寝るか」であったりした。これでも考察の対象とするために、比較が容易でかつ仮に間違えた選択をしても損失の少ない例をあえて選んだつもりである。

現実には選択が多分に理不尽な賭けであって、結果が生死や出世や大金に関わる場合も多い。戦国時代の武将がそうだったし、株とかカジノとかも現代のその例だ。就職や結婚だって、その後の選択責任の重さでは決して負けていない。

さて、今日指摘したいのは、かようなものの選択能力は依然として驚異的なのだが、それでもこのような二者（複数）択一の内に拘っているうちはまだ視野が狭くて、人間本来の能力をフルに使っているとは言えないと言う点だ。

例えば「湯豆腐と冷や奴」の例だが、どうして「どっちも食べたい」と言う答えに、多くの人が行き至らないのだろうか。どっちか一つしか選べないと言う予断がある時点で、多くの人は既に負けている。

そして本当の「第3の選択」とは、全く思いもよらない新しい思いつきだ。「映画か寝るか」について、ちょっと立ち止まって考えれば、「いや、彼女に電話をしてみよう」とか「ちょっとボランティアをするか」とか「明日の予習をしておこう」とか、別次元のよっぽど気が効いたアイデアが浮かぶものだ。「迷ったら立ち止まれ」が蓋然法則、つまりことわざになっても良いほどだ。

ところでこうした全く別次元の気の効いた気付き、どうやって思いつくのだろう。何らかの連想と言う場合も多い。「映画でなくテレビにしよう」とか「寝ると言えばタヌキだからそば屋に行こう」とかだ。一種の水平展開であるが、この程度の「気付き」は、言わばヒントのある独創性の低い、地アタマの悪い気付きだ。IT技術で既に実現されている。

グーグル検索の「ナレッジグラフ」と言う技術だ。詳細は企業秘密だが、要するに立て続けに良く検索されるキーワードの、連携に関する膨大なデータベースを裏に持っていて、それでキーワード同士のネットワークを這っているというもので、これならたしかに意味論的理解なしに形式論のみで、力任せで効率的な検索を行える。つまり、依然として「外からの」形式的な古典的検索で、それに小技が追加されただけである。

ところで同じグーグルが、最近は「画像検索」も提供している。キーワードの代わりに画像を入力すると、類似の画像を表示してくれると言う技術だ。この技術も詳細は企業秘密だが、使ってみた感じでは、色調や画質や、更には事前準備した特定のパターン当てはめを総合利用しているように見える。

例えば源氏物語絵巻を基に画像検索したら、他の源氏物語絵巻ばかりヒットした。色調や画質だけではこのようにはいかないだろう。

自分のパスポート写真を基に検索したら今度は「市川猿之助」と出た。これも人の顔と言う超難解な分析対象を、出たら嬉しくなるような人の顔で人工的に代用しているように見える。

ちょっと変わったところで「ボーイズラブ」の画像を基にしてみたら、ボーイズラブの画像ばかりヒットした。これも色調や画質だけで当てているとは考えにくい。キーワード

で事前入力されているのだろう。

有名人の似顔絵を幾枚か入力してみたが、ことごとく当たらなかった。私から見れば本人より本人らしいのだが、画質が写真と電子画と、こうも違うとダメなようだ。画像の意味論的特徴抽出については余り実装できていないらしい。

そこで写真同士ならどうかと、「そっくりさん」の画像をその手のサイトから借りてきて検索してみた。皆さん笑えるほどにそっくりなのだが、結果はほとんど当たらずに無名の顔が羅列されるだけで、当たったのは故春一番さんのアントニオ猪木くらいだった。

また、画像をわざとぼかすとか、ゆがめたりてみると、当たらなくなる場合も多かった。これは多分、画像が離散コサイン変換で記述されているところ、ぼかすとその基本のところが書き換えられてしまうのだろう。

なお世の中には音声検索と言うのもあって、マックのシーリーとかだが、私はまだ使っていないものの、当たると言うよりは軽妙洒落な返事が返ってくると言う話だから、やはり人力で事前に仕込んだものだろう。

こう見てくると、IT検索はかなり進んだもののあくまでも外形の形式検索の精度向上であって、人特有のアナログ的気付きには全くと言ってよいほど無力のようである。

人の場合、人どころか犬もハチもやっていて元は防衛本能の発露だろうが、論理よりも見てくれや匂い等をアナログで見分けて、それで意味を認識している部分が大きいのだ。もちろん論理の部分もあるから、これら最新検索は思いがけない気付きをしばしば教えてくれはするが、ITは本質的にアナログではない。

そもそも人には五感があって眼耳鼻舌身意であるが、現行で使えるIT検索は言葉と眼と耳のみである。特に身意、つまり体全体で感じてそこから情報を脳処理する部分、更には第六感と呼ばれる直観については無力である。

ここで特に注目したいのは直観力で、何もヒントがない所から脈絡なしに正しく予測できる一種の超能力で、古来偉人や開祖と呼ばれる人々が有していた。最近では天理教の中山みきも、大本教の出口王仁三郎も、外人ではパレスチナのアラファト議長もロシアの怪僧ラスプーチンもこの手の能力を持っていたと言われている。

普通の人でも他人の視線を感じたり、既視感(デジャブ)を感じたりはできるのだが、

瞑想録（その2）

だから第六感の存在は多くの人が信じているのだが、先に言った第六感とは、これの極端に卓越した人々である。占い師や預言者も本物ならこの能力を生かしているのだ。

普通の人でも「あの人は直観がすごい」と言われる無名の人はいくらに居るが、その人たちが学校の成績が良い訳でも何でもない。というか成績が良い人は大抵勘が悪い。逆相関が感じられる。きっと学校の論理教育が直観力を潰しているのであろう。不幸な時代である。

突発的な気付き、あるいはノーヒントで脈絡不在の「第3の道」、ここに至る近道は、あるいはアニミズム的な自然との一体化、あるいは悟りと言う精神的な高い境地にあると思われる。五感に直接基づいているのだ。直観を研ぎ澄ます訓練が重要なのだ。

散々バカにしたIT技術のたとえで恐縮だが、スマートフォンの手かざしに例えるならば、ミドルウェアのプログラム言語よりは物理現象のセンサー受容の次の段階あたりにあるだろう。認識の感性化の段階で概念化の前の段階、言葉になる直前だ。この辺がアナログ演算定式化のヒントになるかもしれない。

17、就活に見る直観力

直観力は良く就活の入社試験で試されます。20くらい質問がある中で、1つくらいは「なんでそんな」みたいな質問が出ます。これに瞬発的に答え、かつ答えに落ちがあり、しかもその落ちが「会社に貢献できる」という趣旨でないといけません。更に良くある続問が、「その質問に自分で答えてみて」ですから、とんでもなく難しいとも言えます。まさに地アタマ、ひらめき力、即応力を試しているわけです。

そこでその手のサイトからいくつかお題を頂き、自分なりに答えてみて、その傾向を分析することにしました。

Q: 首相に3つ質問できるなら、なにがいいか。

A: アベノミクスの見通し、集団的自衛権の行く末、石破さんの処遇について聞きます。（時事も強いと言うところを見せる）

Q: 野球のポジションにたとえると？

A: レフト当たりです。バッテリーのような花型よりも、目立たないが難しい球を確実に取っていきたいです。（控え目なやる気を示す）

瞑想録（その2）

Q: 豊臣秀吉についてどう思うか10秒で答えて。

A: 日本を西欧の覇権主義から救った、先見性のある偉大な人物です。（敢えて良い面を強調して、前向きの性格を出す）

Q: 日本に祝日を1日作るとしたら、何という日を作りますか？

A: 母の日を「女性の日」として休日 にします。（女性問題に敏感であることを示す）

Q: 車のパーツに例えるとあなたは何かですか？

A: フェンダーです。真っ先にぶつかっていきたくたいです。（先頭に立ってやる気を出す）

Q: 詩吟のよさとは何ですか？英語で答えてください。

A: It is cool because it represents the classic culture and the bushido of Japan.（日本のファンを増やしたいと言う愛国心を伝える）

Q: 私とガッツというテーマで30秒話してください。

A: はい、ガッツとは本来「内臓」のことです。人の根性は頭ではなく体、体の中心にあります。私はガッツの精神で仕事に体でぶつかっていきたくたいです。（単なるもやしインテリでない所を強調する）

Q: 殺人事件の被害者からコメントをとるときどうするか。

A: 難しい問題です。被害者の心情を害さずに哀悼することから始めます。そこで被害に遭った人の思い出の一つも聞ければ成功だと思います。（控え目な人格を強調する）

Q: 最後の晩餐で何が食べたいか。

A: 故郷の漬物とみそ汁を頂きたく存じます。（地元愛と謙虚な性格を強調する）

Q: 鉛筆を長年愛用しているお客様に、文房具店の店員のつもりでシャープペンシルをおすすめしてください。

A: 新しいものになれるのはちょっと大変ですが達成感があります。シャーペン は芯のみで木を用いることなく常に書けて、便利でかつエコです。（相手の気持ちに沿いつつエコにも関心があることを示す）

Q: なぜ東大に行かなかったか。

A: 金太郎飴になりたくなかったからです。自分のカラーを生かしてくれることを、敢え

瞑想録（その2）

て世間の評価を外して選びました。（流されない自主性があることを示す）

Q:ここでビジネスやらなかったらこの国の人が死んでしまうけど、その国の大臣に賄賂をあげないとビジネスができない場合どうする？

A:「どちらか1つ」と言う選択肢に愚直に答えるのは必ずしも最良ではありません。賄賂は後々問題になるので気持ち程度にして長い交渉をし、他方で人々を救うために呼びかけをします。（柔軟な対応と行きすぎない正義感をアピール）

Q:カレーの具ならなに？

A:ナスです。ナスは普通カレーに入れませんが、入れるとルーを吸って良い味になります。（既成概念に捕らわれず常に工夫することを示す）

Q:カラオケでは踊ったりしますか。

A:普通は踊りませんが、その場の空気を重視します。（空気が読める協調性をアピール）

Q:お坊さんにクシを売るとしたら、どうやって売りますか。

A:毛を伸ばして下さい、髪を梳かして上げましょう。（頓知の乗りで機転を示す）

Q:エスぺラント語はなぜ流行らなかったか。

A:人間臭さを無視してシステムの効率性に走りすぎたからです。（人間第一主義を強調する）

Q:エアーギターしてくれる？

A:はあ、下手で良ければどんな指示にも従います。（従順性を示す）

Q:あなたを寿司ネタに例えると？

A:生エビです。ぷりぷりした食感が私の新鮮さに近いと思います。（生きの良い感じを出す）

Q:あなたを時代劇の人物に例えると誰？

A:桃太郎侍です。肝心な時に出てきて格好良く勧善懲悪をするところに気が合います。（タイミングを逃さない点をアピール）

Q:あなたをお子様ランチの具にたとえると？

A:ウインナーですね。子供が最も好きな具です。子供にも大人にも、誰にも好かれる

人間になりたいです。（ちょっと強引だが人間性をアピール）

以上、実際にやってみて、即答しないと減点なので、まず適当に答えを言って、後から強引にアドリブで理屈を付けていく感じですね。同時通訳と似ているかもしれません。即答については、問いから連想される答え群から、インパクトがありかつ無難な物を蓋然的に選んでいます。

こういう問題の場合思いつきは連想力が主流になり、突飛もないつまり独創性の高い無関係な話題は返って危険です。今回のまとめは、前例もなく後付けの理屈も立たない、全く突発的かつ超常的な気付きの構造を探索していた過程での作業でしたが、結果的には問題設定が目的と少し違ったようでした。もちろん今回のまとめにはそれなりの意味はありますが。高等遊民の日々の試行錯誤です。

18、切れる人の頭の構造

世の中にはいろんな種類の「切れる人」が居る。まあ一流大学に入る人も、やる気はともかく一応切れる人なのだろうが、私が今注目したいのはむしろ、中卒高卒なのに切れる人たちだ。なぜならこういう人たちこそ混じりけなく真の「切れる」を保有していて、かつ「切れる」の本質を純粹に取り出せるように見えるからだ。

作家の松本清張などはその好例だが、もう昔の人であり、その書かれた作品を通してしか彼の「切れる」の構造を解明できない。最近だとすかいら一く創始者の茅野元社長とか、大御所俳優の松平健こと鈴木末七さんとか、あるいはヤフーブログチャンピオンで本も出した料理研究家の「こうちゃん」とかが思い浮かぶ。

この中で「こうちゃん」は情報を仕入れやすい。もう10年にもわたってほぼ毎日創作料理を紹介しているが、その素材の海から山からの組み合わせ方、料理法の多岐、出来上がりの見えてくれ等々、毎日の提案がー々素晴らしい。しかもそれらをまとめて並べてもワンパターンにならないほど多次元的多面的にできている。

こういった人々を見ていると、共通するのは連想すらない突発的で、後付けの理屈すらつかない、しかし多くの人が素晴らしいと感動する気付きであって、これはある意味悟りにポンと落ちるその境地に似ている。あるいは「君子は豹変する」と言うことわざの、その「納得できる豹変ぶり」にも近い。こういう真の創造力はどこから来るのだろうか。

瞑想録（その2）

その全容の解明には膨大な瞑想が必要であろうが、ひとつこれはあると思えるのが、「景観以上概念未満の気付き」だ。例えば家の中を何気なく見まわして、ことさらに目的もないのになぜか印象に残る事物がある。あるいは夢の中でなぜか予期しなかった情景が浮かんでくる。またあるいはTVを見ながらもストーリーと関係ないことがなぜか心に浮かんできたりする。

こういう「気付き」は極めて素朴なものであり、大抵一瞬で通り過ぎて忘れてしまう。しかしこの手の気付きは決して、まるっきり意味のない単なる景観とか雑音ではない。人はそこに何らかの「切り取り」をしているのだ。しかし概念と言うほど確固になってもいない。そこまで固まってしまうともはや排他的イデオロギーになってしまっていて、取り付くシマもない。この面からは欧米人の特にキリスト教は概念側に寄り過ぎていて、こういう素朴な気付きを無残に圧殺してしまう。

物事はどんな事象でも多面的であって、仮に刹那的であっても無限個のインデックスを潜在的に有している。それらの中から目前の功利に関係なく、ふと「へえ面白い」と直観的に感じたことが何となく心の底に沈んでいて、あるきっかけによって浮上し、それが前例のない創造の力となり形になっていくように見える。

ちなみにこれは連想力とは異なる。連想は直接的外的な連繋であって、生産現場の水平展開のように誰でも出来る、パターン化されたものである。デジタルIT技術でも実現できる低い能力なのだ。今述べた「素朴な気付き」は、このような低次元の整合圧力を拒否している。

先に挙げた素朴なインデックス、景観以上概念未満の事象の切り取り、これが上手で、効率良く、かつダイナミックで多彩な人、こういう能力に長けた人が即ち「切れる人」ではないだろうか。心のたくさんのポケットの中に素材が満載なのだ。

もちろんかような能力は後天的な経験によって伸長するのではあるが、それにしても生まれつきこういう能力のない人がいくら努力しても、それは単純に無駄である。強いて言えばこういう能力をコンパクト程度に持っている人が一流大学に器用に入り、会社もこういう人が手ごろだから雇うのであろうが、真の創発力は実はコンパクト過ぎてダメなのだ。

だから学歴無視で探した方が真の「切れる人」を掘り出せるのだが、ただ一般的に言くと、学歴が高くないほど凡庸な人の割合が膨大になってしまうと言う難しい面がある。

瞑想録（その2）

藁の中に針を探すようなものなのだ。ここに切れる人を掘り出す難しさがある。そう言った人々が自ら頭角を現すのを待つしかないほどだ。

諸葛孔明は自ら学んだ人であるが、赤壁の戦いで圧倒的な戦況不利の中にあって、風の流れの微妙な変化から勝機を読んだ。これが真の創発力の好例である。「風の微妙な違い」はおおよそ言葉にできないような微妙な違いであり、孔明は全身をセンサーにして、生まれながらの天賦の才とそれまでの経験を総動員して、その確実な予知に至ったのである。そしてセンスのない人には分からないだろうが、ひらめく時は「す」とんと落ちる」感覚が随伴するので、確信が持てる。

今日の瞑想をまとめると、功利無視の、景観以上概念未満の、素朴な事物の、効率的かつダイナミックなインデックス化、これが「切れる頭」の正体であろうと思われる。そうであるとして、ここに働く演算とはどのようなものであろうか。もちろん連想のような安っぽいものではない。ここでより本質的なのは、演算よりも、あるいは形状認識を含む特徴抽出よりも、むしろ蓋然現象に係る「解釈ツール」なのかもしれない。

これらについてはもうしばらく瞑想することにした。

19、愚かとの闘い

人生は愚かとの闘いではないかと思う。人にとっての最大の脅威は、サタンでなくむしろ愚かだと思えるほどだ。自分自身を振り返ってみても、学生時代は学問的手続きの愚かさとの、会社員時代は会社や社会の愚かさとの、そして今は地域や血縁等との愚かさとの、更に人生を通してはデジタル形式論理と言う愚かさとの闘いであつたように思う。世の中は大多数の愚か者と小数の気の効いた人々で構成されており、世の中の仕組みはまさにマルクスの预言通りに、大多数の愚かな人々が生きやすいような規格で出来ているのだ。

ここで気の効いたとは、知識の数とかあるいは何らかの権威だとか言うことでなく、人より先を見通せて、一を聞いて十を知り、気の効いた警句を吐き続ける、地アタマの良い人だ。愚か者は十を聞いて一しか覚ええない。

本ブログで何度か取り上げたヒッピー運動、これも始めは、「愚かこそ偉い」とのたまう、本末転倒も良い所で精神修養とおおよそ無縁な、キリスト教に対する知的アンチテーゼとして始まった。だから始まりは賢かった。中には実際に愚かの束縛から逃れて、「上がり」に至った人々もかなり居ることだろう。だが流行とともに運動は庶民化し、愚か

瞑想録（その2）

な大衆がどっと流入して、「セックスとドラッグこそ最高」程度の活動になってしまい、そして流産した。幸せを追求するのは賢者としてむしろ正しい態度なのだが、その幸せが高々セックスとドラッグでは、何とも寂しいことだ。

ヒッピーが流産したのは、一言で言うと組織の不在にある。組織化されていれば最低の歯止めは有っただろう。だが組織化とともに集団の論理が入りこみ、そこは賢者の場でなく愚か者が理解できる程度の、束縛された、最低限は保証するが最低限しか保証しない場になってしまう。するとそこはもはや賢者の場ではない。だから賢者には基本的に居場所がなく、孤独を除けば現世には闘いしかない。

カルメル女子修道会は、キリスト教にしては珍しく、「私たちを愚かな修道女からお守りください」と祈ると言う。珍しく正しいので、あの業界で異端の烙印を押されないか、人ごとながら心配なほどである。そして彼女らの祈りは永遠に叶うことはない。なぜなら賢者の上には更により高い賢者が居り、そのより高い賢者に対しては、平均的賢者は愚か者として働いてしまうからだ。私自身自分を最底辺の愚か者だとは思っていないが、自分よりもっと賢い人には、恥知らずにも知らずに、愚かの失礼をしていることだろう。

私はこの世の圧倒的な愚かに対して、基本的に不誠実で対決してきた。愚かな質問には愚かな答えが適切だからである。大抵の愚かに対しては、のりくらりとしたり、逆に愚かなふりをしたり気配を消したりして、かわしやり過ごしてきた。だがどうしても避けられない愚かさに対しては先制攻撃で対応した。攻撃こそ最大の防御だからである。総じて「エネルギー最小の原理」に従っている。愚かに労苦を払うのは最大級の愚かさだからである。

あともう一つ、私が大事にしているのは、中国の賢者である老子が唱えた「無為自然」である。自分に素直に、自然に素直に、そして神々に素直に生きるのだ。そもそも老子自身忽然と世に現れ、自分の高い教えを周囲の人々に伝え、そして世から忽然と消えて行った。この生き方は彼の教えそのものを実践と態度で示しており、まさに最高の美学である。

東洋思想のほとんどは何らかの形で老子の影響を受け、あるいは結果として同じところに帰結している。その一つで、「最終宗教」とも言える修験道、この道にも潔斎の仕方とか山籠りの仕方とか一定の形はあるが、どういう道でどこまで悟りかつ自然と一体化するかは、完全に経験主義的でありかつ個人単位なのである。つまり集団の論理に縛られない。こういう集団のあり方こそ最高であろう。

自然は本来多樣的多面的にキラキラと絢爛豪華に輝いている。しかもそれでなおかつ、太極とも言うべき一本の筋が通っている。こういう自然と一体化して不要な作為を辞めれば、自然こそが、そしてそれに映し出された自分自身が最高の教師であり、放っておいても自ずと向上していくものだ。自我を捨てて感性を磨けばよい。それが最も自由な道である。欧米系の一神教は小さな頭で屁理屈を言い、しかもその小理屈でさも全宇宙が理解できるかのつじつまを付ける。さかしらの限りである。私の永遠の闘いも、このさかしらに対する闘いであるように思う。

もっともこれらの闘いも、また今までの経験した闘いの場も、全くの無駄だったとは思っていない。効率は極めて悪かったが、それでも闘わなければ得られなかった「貴重な体験」が得られたように思う。一般に、純粹に修業に専念した方が効率良く悟れるように思われているが、悟りとは体験であるから、自ら手を汚して泥にまみれないと、真の悟りには至れないのだ。よくセンセー達が「現場の話を聞く会」とやらをやっている、「象牙の塔にありながら現場にも関心を持つのは偉い」と思われがちだが、これが現実には「手を汚さずに上澄みだけ頂いてしまえ」の会なのである。そして手を汚さずに入手できるほど、悟りや自然は甘くない。

私はこれまでに足を踏み入れた場所に2度と行きたいとは思わないし、そこで知り合った人々にも2度と会いたいと思わない。所詮は小物の烏合の衆の場であつた。老子のような偉大な人物はいなかった。それにも拘らず汚れを通して見えてきたものはしっかりとあり、そのことには感謝している。即ち、人を自由にするのが真の賢さである。私のハンドルネームの「無縛」も、かような意味を汲んで付けたものだ。

私はまだ死んでいないから、愚かとの闘いはまだ終わっていない。その意味で決して油断してはいないが、もうこれ以上の修業が必要なのかと言う思いもある。今の人は寿命が尽きるまで平均5年は要介護状態と言うから、この要介護がおそらく私の最後の修業になるのだろう。痴呆老人になる前に、これまでの修業の成果をどれだけ形にすることが出来るか、私の人生の価値はひたすらその一点にかかっているように思われる。

20、人は理屈では納得しない

論理学と言う学問がある。正しい理屈のありようを調べる学問である。三段論法とか対偶とか背理法とか、あるいは逆理（パドックス）とかゲーデルの不完全性定理などがこの分野の主な成果である。そもそもはギリシャ哲学から発生した学問であるが、

瞑想録（その2）

一神教、特にキリスト教における神の無謬性の証明の要請に刺激されて、特にその方向に発展した。ただし矛盾を許容しないと「出るべき成果はせいぜいこの辺か」との、終わった感もある。

そもそも理屈と言うものが尊重されるのは、その大元に、「人は理屈において納得するものだ」と言う素朴な信仰がある。事実欧米では弁証法が用意されていて、例えば相手のチョンボを因縁でも良いから強引に取る時には、「些細なミスのでっち上げ→さもなくば不注意の抗弁（全行為ごとに時計を見てなかったとか全場面で証人を用意していなかった等の無理筋）→「不作為によるお前の罪だ」宣言→公開謝罪要求→膨大な損害賠償」と、あこぎな追及手順もシステム化されているほどだ。

このような理屈のみによる実態を欠いた表面的な証明方法で、あるいは欧米人キリスト教徒は折伏（しゃくぶく）させられるのかもしれないが、このような人工的かつ後天的でない、人本来の自然な本性を見る限り、人々は日々理屈で納得しているとはおよそ思えないのだ。

そこで、人々の思考様式と理屈・論理との関係を、いくつかの例で見てみよう。

<例1> 受付票に「発送は申し込み後2日」とあるから、物が来るのはあさってもしくはそれ以降だろう。

これは理屈通りで疑う余地がない。まあいわゆる標準パターンです。理屈ではあるが自然に認容できます。

<例2> 先日ふとしたことでアニメソングが気になって、娘に「♪インケンインケン」とかで始まる歌は何と言う題だったかなと聞くと、「イカ娘じゃないか」と答える。言われてみるとその通りなので、正しく「♪侵略^2 イカ娘～」などと歌っていて数日後に、またふと、なぜこの歌が気になったのか気になった。すると娘が再び「私が先週江ノ島に行ってきたからではないの」と答える。再びなるほどだ。驚きと感動もひとしおだった。

ただこの例は、一見理屈が分かったことによる納得に見えるが、実際は断片が繋がったために統一的理解が進んだ、つまりミッシングリンクが繋がったことによる喜びと驚きのように思える。

<例3> 電磁波は横波だけで縦波はない。理由は支配方程式が「回転・回転」形で、「勾配・発散」形でないからだ。

これは全くの理論通り・理屈通りで演繹法しか使っていないので、疑義をはさむ余地がないのですが、多くの人は納得できないでしょう。電磁波について相場観や経験がないために、納得する方法がないからです。

＜例4＞10年ほど前（悠仁さま誕生前）に提出された皇室の将来に関する「吉川答申」では、「皇室の存続のためには、①宮家の復活か②女系天皇の認容の、少なくともどちらかが必要だ」とされた。これは工学者の吉川先生がシステム論的手法で導いた解で、理屈や論理の上では争う余地は全くないのだが、主として神社筋から「女系天皇（女性天皇の子孫が皇統を継ぐこと）は前例がない」との感情的な大反対が出て、結局潰れた。

これも、世の中は多分に、理屈よりも感情が優っていることを示している。

＜例5＞最近亡くなられた作詞家の山口洋子さんの作品に、「折れた煙草の吸殻であなたのウソが分かるのよ」という歌がある。もうここまで行くと理屈は全く存在していない。煙草とウソの間におよそ何の因果関係もない。でも我々はこの歌詞の含蓄が良く分かる。だからこそヒットしたのだが。

つまり我々は普段から、「言葉でなくしぐさ等全体像からその人の前後や深い所を感じ取る」と言う経験を有していて、それが敏感に反応する訳だ。むしろ理屈がないからこそしみじみ伝わるとすら言える。

＜例6＞続いてこんな例はどうだろう。ある人が駐車場で車の運転を誤って、コンビニの入り口付近に突っ込んでしまった。怒って出てくる店長に運転手は「あの、店の間口を広げてお客が入りやすいようにしておきました」と答える。これって理屈はついているけれどもおよそ信じられない。一般人の常識がこの運転手の誠意すら疑っている。

この例に至っては、理屈は返って火に油を注ぐだけ、ない方がなんぼかました。本心を隠すために上辺の理屈を付けてごまかす、これは我々が日常茶飯事で多々見聞きすることである。

だがもし仮に理屈に穴をあけてしまうと、これは直ちに「どんな嘘も出まかせも堂々と通用する」ことになってしまわないか。実は理論上はその通りであって、論理学には「その体系に1つでも矛盾があれば、その体系内のあらゆる述語論理を真とすることができる」という定理まである。だとしたらこの世は全くの無秩序、天下御免になってしまわないか。

理屈上はその通りだ。だがここで幸いなことに、感情も主観ではあるものの「何でもあり」ではなくて、蓋然的に通る感情と通らない感情がある。「義を見てしないのは勇なきなり」、これは潔い武士道の観点で通る。「小さな親切は大きな迷惑」、まあこれもしばしば通る。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」これもしばしば通る。逆に「赤信号、みんなで渡ればみんな死ぬ」、これは理論通りだがブラックユーモアにしか聞こえない。「ウソも3回言えば本当になる」、そろそろ危ない。「強者を助け弱者をくじく」、この辺になると限りなく通らない。「朝改暮令」、人はほとんど付いてこない。「狼が出たぞ」、誰にも信用してもらえない。「右目で泣いて左目で笑う」、もはや人間性を疑われる。「弁舌が変にさわやか」、まともな人なら警戒する。「シリアスな話が急にお笑いになる」、人は真剣さを疑う。「えこひいき」、糾弾の対象になる。「借りを返さない」、本当ならたとえ合法でも非難される。

中国の歴史で、項羽と劉邦は対照的な人柄であった。有名な鴻門の会で、項羽は劉邦をだまし討ちに出来たのに、それを潔いとせずにあえて見逃した。そこで部下の長老たちは、「青二才と一緒に戦はできない」と嘆いた。そして実にこの時に項羽の近未来での敗死の運命が決まったと言える。ところが、似たような行いをしても薩摩の西郷隆盛が長州の山形有朋の悪事を敢えて見逃した時は、「懐の深い人だ」との好評価となった。同じ理屈でも登場人物や周辺状況に応じて評価はまるで変わるのだ。人の心は論理のように硬直してはいないし、多値でもある。

最近朝日新聞が、同じ日の同じ紙面に、「STAP細胞は出来たと言う人がいるが再現性がないから信じられない」と、「いわゆる慰安婦は吉田証言が虚偽だと判明したが本当だと言う人がいるから本当だ」を並べて書いて、「マスコミとは思えない二重基準」と批判された。たしかに理屈の上では批判通りであり、世界に告発発信するにはこれで十分だが、人の感情はもっと深くて、「二重基準＝直ちに違反で敗北」ではなく、今回の二重基準がいかにも意図的であると言う感情的な理由で、人々は嫌うのだ。

以上の議論から結論できることは、「人は科学的論理的思考にもっと励むべきだ」ではなく逆に、「人は健全な感情を持てるようにもっと情操教育を強化せよ」となる。

21、突き抜けて表に出る

先日にも書きましたが、私は学生時代には学問的手続きに、会社員時代には会社や社会の習慣や手続きに、そして現在は地縁血縁のバカらしさに、更に人生を通してずっとデジタル形式論理に、それぞれ違和感や反感を持ってきました。要するに私には、現在に至るまで安住の地や天職に至ることがなかった訳です。私自身、自分がボヘミ

瞑想録（その2）

アンであることは良く知っていて、それがむしろ誇りやアイデンティティーでもあるのですが、他方でいつまでも天職に至れないのも座りが悪く不自然です。

では、これまでこのブログに書き連ねた瞑想を基に、やりたくないことの諸々は分かったものの、では結局私は一体、具体的に何をやりたいのでしょうか、自問したくなります。ところがこれが、表現するのが意外と難しい。東洋の雄のヨガでは、「真理は否定形でしか示されない」と言うのが究極の悟りです。曰く、「土の神は水を潜れない、木の神は火を通れない」。

これはつまり、もし特定の「何か」になったら、それは即誤りだと言うのです。人も物も多様で無限のインデックスを持つところ、その1つに拘り過ぎると、残りの多面性に目が行かなくなって迷うと言う、人の知恵の浅はかさに対する戒めです。ちなみにこれが少し変わって、仏教の「執着を捨てよ」と言う教えになりました。

だが、原理的に難しいとはいえ、結局何をやりたいのか、近似でも良いから陽に言葉にしないと、ちっとも前に進めない、あるいはもどかしいという現実もあります。そこで私は、しばしこの点について瞑想しました。そして気付いたのですが、私は「見抜き」とか「予言」とか、そう言うことをやりたいのです。ここで見抜きとは、人が見通せない遥か先まで見通すこと、そして予言はその見通しを言葉にして開示することです。これらのことをやりたい理由は、これらが智恵のもっとも高度な使い方だと確信するからです。

例示するならば、もし科学業界に居ても、真理のありかについては予想を語るがその証明責任は負わないと言う立場です。証明をやらない理由は、それがひたすら退屈でつまらなく、かつ知恵と縁遠いからです。もた、未来について予測の場合も、あくまでも予測の表明に留め、結果についての確認はだれか別のやりたい人にやってもらうということです。なお、予測ですからそこに論理的必然性は全く無くて、全て論理無視の蓋然推定になります。そして蓋然推定だから必ず当たるとは約束しません。むしろ当たるか否かよりも推定の面白さ、つまりそこに知恵がどれだけ点呼盛りで、予言にどれだけ意外さが満ちているかを重視します。

こう言うやり方は一步間違うと、週刊誌的なあおりになってしまいますが、それでも敢えてそのリスクを恐れません。そして私の予言を信じるか否かは、人々がそれを尤もらしいと感じるか否かによって、各人が自己責任で選択してもらいます。だからその態様は、科学よりも占いや芸術に遥かに近いものです。端的に言えば、科学よりも占いや芸術の方が、智恵が深いということになります。

瞑想録（その2）

科学の例になってしまいますが、ニュートンがリンゴの落ちるのを見て万有引力を発見した、あるいはガリレオが天体の軌道について瞑想していて地動説に気付いたのは有名な例ですが、私自身もこれまでにいくつかの小さなひらめきを行い、そのいくつかはこのブログで披露してきました。

変に親切な外人の態度を見て、この人は「旅人に親切にした」という実績を作って教会で点数稼ぎをしたいだけだと見抜いたり、「お住まいはどちら」と親しげに声をかける店の主人が実は「よそ者だったら吹っかけて売ろう」という魂胆だと見抜いたり、あるいはどうしても抜けなくなったタンブラーの壁紙を抜く方法を発見したりもしました。難病支援を謳って最近流行った「氷水かぶり」を、「これは本質的に不幸の手紙とイッキ飲み（飲ませ）だ」と直ちに直感しました。

また、映画の「ラストエンペラー」を見て、「主演のジョンローンはおカマだろう」と直感しました。アマゾンの「お急ぎ便お試し・今申し込むと無料」という誘いを、「これは放置しておくとも自動的に課金される詐欺まがいだ」と見抜いて事なきを得たこともあります。また、理屈で因縁を付けてくる外人の論理ストーリーを先に見抜いて、敢えて先制でそれをぶち壊したことも何度もあります。

これらの気付きの肝と言うか構造は、第一義的には先天的な直観そのものにありません。そしてその直観を助ける二次的なヒントとして、後天的な人生体験に基づく種々の場面での相場観があると言う順番になります。

ひらめきは、その「相場観」に照らして「何か違うな」と一種の不自然さに気付くところに始まり、その違いの理由は何かを瞑想するうちに答えが浮上してくるという場合が多いです。そしてしばしば、正解のありかが周辺より光って見えて、答えの方が自ら進んで存在を教えてくれるのです。ウォルト・ディズニーはネズミが走り回るのを見て、まるでネズミが「描いてくれ」と言っているように見えたそうです。そしてこれがミッキーマウスに結実しました。一種のカモネギと言って良いでしょう。これと同じところが見抜きにもあると感じます。

この辺の、言わば「自分のしたいこと及びその構造」が見えた時、自分はあたかも「自分を突きぬけられた」かの感がしました。あたかも、今までは裏側からしか見えていなかった自分の、ひっくり返した表側がありありと見えたような清々しさでした。傘がお猪口になった感じとも言えます。

いや、実はそれよりもっと広いのです。もっと広く私は、これらの見抜きを系統的に実施することにより、今の世の実は、「万能に見えて実は偏ったある一面しか照らされていない」、その照らされていない面に光を当てることにより、自分のみならず世の中自身も表と裏を反転させることにより、世の中のまるで異次元の見方を提示したいのです。

そしてその一部分として、現行の四則演算に代わる新たな演算も模索していると言う位置づけになります。私がキリスト教西欧文明に対して一貫して辛口なもの、今はそれが表であるところ、これを脱ぎ棄てない限り突き抜けて新たな平面に着地することが出来ないと知っているからです。そしてこの真の表に至る一連の瞑想を、あたかも老子のように、当面は雑音なくマイペースで静かにやりたいと思います。それほど集中を要することだからです。だから学会発表のようなことはまるで考えていません。

そしてそこで用いる手法は、直観と理性を適材適所に組み合わせた形であり、過去の思想家に例えれば「日本人とユダヤ人」を著したイザヤ・ベンダサンこと山本七平先生になります。詳しく述べますと、手法的には山本先生に近いところがあるのですが、山本先生と決定的に異なる点は、①先生は文系で私は理系なので厚い本よりは系統的な要点の記述をしたい、②先生はユダヤ教を鏡にして日本人の特異さを暴いたが私は日本的アニミズムを鏡にして世界標準のかたわ加減を説きたい、③先生の業績は究極的に科学であるが私は自分の解明内容を科学でないと明言している、の3点になります。

こうして内省してみると、ここ数カ月このブログに掲載してきた諸論点についても系統化が可能になってきます。そしてその系統のまだ埋まっていない所やもっと成長すべきところを、これからも断続的に瞑想・記述していくつもりです。

22、覚者イエス

イエスさんは覚者である。その証拠に非常に気の効いた警句や奇跡や予言を山ほど行っている。これはすごいことだ。東洋ではともかく西洋ではめったに見られない。中には「イエスさんは若いころチベットで修業をした」と主張する人々も居る。私は、ここまでの合理化は不要だと思うが、そう言う説が出てきてもおかしくないほどだ。

伝統的キリスト教ではイエスさんのことを「救い主」としか見ていないが、これは興ざめ艶消しもはなはだしい。イエスさんの知恵を余りにも小馬鹿にしている。現在のキリスト教はむしろパウロ教である。イエスさんをイエスさんとは背反の「キリスト教」の色眼

鏡で見ると、彼の本質をまるで見失う。人々がキリスト教をイエスさんの正当後継と思
いこんでいることを一番嘆いているのは、ほかならぬイエスさんのはずだ。イエスさん
は今、パウロによって座敷牢に押し込められて、涙を流している。

ところがここで疑問が出てくる。もしイエスさんが覚者であるなら未来を読めたはずだ。
だから、いずれ独りよがりやで頭が腐った「使徒」パウロが勝手にしゃしゃり出て一人の
相撲に明け暮れた挙句にイエスさんの教えを改ざんすることは、十分見えていたはず
だ。だとしたらどうして生前中にパウロに対する歯止めあるいは対抗手段を打ってお
かなかったのだろうか。

一番手軽な歯止めは、パウロがしゃしゃり出ないように例えば流産させてしまうことだ
が、これは賢者のやり方ではない。むしろパウロの口車に乗せられないような優秀な
人物たちを弟子にする方が正攻法と言うものだ。ではイエスさんはどうやって弟子を
選んだのだろうか。

寄り来る衆生のうちから弟子を選んだなら、特に宗教の初期は余り優秀な人は来な
いものだから仕方ないとも言えるだろうが、イエスさんの場合自分から声をかけて弟
子にしている。例えばペテロは無教養な漁師だった。他にもマタイは取税人、シモン
は革命論者だった。当時のいわゆる知識階級は一人もいない。

これを称してキリスト教は、「イエスが被抑圧者の見方だった」と自己正当化をしてい
るが、既に既成概念に毒された連中は返って教導しにくかったと言うのが実際のところ
だろう。素の人間から物になりそうなものを選んだと言うことだ。それにしてもこういう
「うらぶれた」連中の中にも、パウロのウソを却下できるほどの能力のある人物は、探
せば居たはずだ。だがイエスさんはそこまであるいはそういう種類の努力していない。

ペテロ等イエスさんが生前に選んだ12弟子は、いずれもイエスさんの死後世界中に
散らばって宣教するが、彼らの法灯は決して長くは続かなかった。いずれも歴史のか
なたに消滅している。そしてイエスさんほどの覚者ならこういう未来も予測していたは
ずだ。

イエスさんは予測できていながらしなかった。これはつまり、法灯継承にさほど熱心で
なかったと言うことだ。つまりイエスさんは自分の悟りを後世に残すことに、さほど執
着はなかった。もっと言えば自分の悟りを、人々が今思うほどにすごいものとは思っ
ていなかったのだろう。

「このくらいやれば結構出来るさ」程度の謙遜な自己評価だったのだ。実際もしイエスさんが法灯の維持に熱心だったら、最後の局面でいともやすやすと十字架にかかって死ぬわけがない。ちょっと知恵を使えばいくらでも避けられた「十字架」であった。ここに典型的にイエスさんの執着のない性格が表れている。

イエスさんが弟子選びに無頓着だったおかげで、現代世界は、パウロ教にマルクス・パウロ教とも呼ぶべき共産主義を加えると、世界の半分を覆うかの勢いになっており、人類を愚かにして未来に暗雲を投げかけているのだが、イエスさんはそんなことにすら無頓着だった。つまりイエスさんにとっては俗世界の危機すら重要事項ではなかった。

結局イエスさんも老子と同様に、彗星のごとくに現れ、そしてすい星のごとくに去っていったのだ。これは男の美学でもある。老子も自分の悟りの布教にまるで熱心でなかった。強く頼まれなければ教えずに去っていったほどである。それは彼自身の内面が充実していたからだ。この観点からイエスさんを見ると、やはりイエスさんの公生涯も内面が実に充実していた。そして覚者が充実すると、あらゆる執着から解き放たれるのだ。

その充実したイエスさんの悟りと素顔を、我々凡人はもっと知りたいと思う。ところが残念なことに、イエスさんの生涯を記述した福音書の段階で、既に集団の論理やパウロー派の色眼鏡が入ってしまっているのだ。だが仏教に目をやると、大乘仏教で最も珍重される經典の1つである法華經、これは釈迦の死後千年以上を経て記されたものであり、かつ釈迦の教えを生前の釈迦を越えて的確に表現している。その超え方は「大乘非仏説」が出てくるほどなのだ。

キリスト教は異端審問と路線闘争がお家芸で、いたずらに信徒を縮み上がらせているために自縄自縛状態になっていて、およそこういう開明的なことはできないだろうから、キリスト教の外でイエスさんの、実存のイエスさんをも越えた悟りが結集(けつじゅう)されることを、人類の未来のために強く望むものである。

23、学生運動の心理と顛末

今からもう40年も前のことだが、70年安保と称する運動が勃興し、学生運動が燃え上がった。この学生運動の結末を象徴する事件が、1971年から1972年にかけて発生した「山岳ベース事件」である。それまでの経緯により先鋭化した学生活動家達は、

瞑想録（その2）

大菩薩峠や迦葉山や榛名山等の「山岳ベース」に追い詰められた。そして孤独感が募る中、「総括」と称して同志10人以上を虐殺したのだ。一種の内ゲバである。この異常心理はどこから来たのだろうか。

このころ学生たちが学生運動に走ったのは、流行りに乗った面もあるとは言え、基本的にマルクス主義が世直しの理想的なツールに見えたからだ。「若者は、一度は共産主義と太宰治にはまるものだ」との言葉にもあるように、マルクス主義は、まだ人生経験の少ない世の中の裏や複雑さや凡庸さを知らない純粋な学生達には、世直しの夢を理論整然と語る打ち出の小槌に見えたのだ。「弁舌さわやか過ぎて返って怪しい」と言った警戒感は、彼らにはまだ生まれていない。

そこでこぞって参加した学生運動、これがやっているうちに段々と極端化し先鋭化していく。「徹底的にやれ、さもなければお前は転んでいる」、マルクスがこう教えているからだ。もちろん先鋭化に疑問を感じて脱退した若者も多かったが、山岳ベース事件は初心を貫いた、その意味では教団から称賛されるべきエリート達に起こった。

先鋭化とともに一般大衆の支持を失った先鋭部隊は、カルトの末路を絵に描いたように殻に籠り、人里離れた山岳地帯に転戦する。そしてますます孤立感を深めて疑心暗鬼になる。ここでその疑心暗鬼に理論がささやく、「異端が混迷の元凶だ、異端の奴らを始末しろ」と。こうして首謀者たちは、ある意味自己の疑心暗鬼の直視を避けるために、合法的に路線闘争と異端審問を行った。

この総括を仕切った最高幹部たち、逮捕されてみると一々がごく普通の、ちょっと極端に走りやすいだけの小心的な学生たちだった。マルクス主義は、小心な一般人を狂気に走らす暴走道具でもあるのだ。ちなみに、ハンナ・アーレントが鋭く見抜いたように、先の大戦でユダヤ人を殲滅したナチの将校たちも、そのほとんどが凡庸で気の小さい、どこにでも居るような一市民だったと言う。

このようにして学生運動は、マルクス主義をそのままに実演しながら自滅していった。マルクスは「資本家はその熱心によって墓穴を掘る」と言ったが、マルクス主義だってその熱心によって墓穴を掘るのだ。そしてこの事件に典型的に見られるように、明るい未来という看板に始まり異端審問による破門に終わる一連の必然的顛末、これはキリスト教の一連の必然と全く同様だ。

キリスト教は、今はあからさまに人殺しはしていない、少なくとも尻尾はつかまれているが、新教旧教戦争やアルビジオア派の追放等に見られるように、また魔女狩りと

火あぶりに見られるように、つい最近まで今のイスラム国そのけの殺人集団だった。学生運動の方が凄惨なのは、マルクス主義の方がキリスト教よりもちょっと徹底していただけてあって、本質は変わらない。

ではここで問いたい。キリスト教やマルクス主義に見られる世直しの良い要素と、異端審問のようなおぞましい要素は分離できないのか。もし分離できるなら、良いとこだけ取れば、これは素晴らしいことだろう。だが現実には分離は不可能だ。

西洋的キリスト教的世直しは、彼らの国民性もあって集団に働きかけるものであり、この点が個人の悟りを目指す東洋系宗教と異なっている。彼らはあくまでもシステム志向なのだ。集団的かつシステムのであれば必然的に組織や統制が随伴する。そして組織や統制はけじめや路線統一があって初めて可能なのだ。そしてそのためには路線に逆らう者の除名や処罰が有って初めて実体化できる。つまり、世直しと異端審問は同じ物の裏表であって分離不可能なのだ。そして学生たちもキリスト教入信者たちも少なくともその入信当初は、表の面しか見えていない。

では更に問おう。そもそも悟りの高い日本人が、特に70年代と言う時に、なぜイデオロギー的な学生運動を起こしたのか。まず気質について言えば、第一に挙げられるのは戦後の欧米式の理性教育だ。この欧米式論理教育、これは多分にキリスト教論理の教導や伝道と同じ形式なのだが、これが日本人の特に若者をイデオロギーフレンドリーにした。次に70年代について言えば、70年代とは終戦後約30年であり、ちょうど新教育が定着して実を結ぶころなのだ。もちろんこの時代にもベトナム反戦のような社会問題はあったが、この程度の社会問題は内容こそ異なれいつでもあるものだ。だから基本的には新教育、いわゆる科学教育に起因していると言える。

ではなぜ70年代以降にはこのような学生蜂起は起こらなくなったのか。新教育はますます定着したはずではないのか。これはその通りなのだが、先輩たちの学生運動の顛末を見て、これらを反面教師にした、学習したのだ。そして日本社会も学習をした。マルクスの予言はあたかもタイムパラドックスのようである。彼の予言がなかったら日本や世界の資本主義は、マルクスの予言どおりに破たんしていたことだろう。だがマルクスが予言してくれたおかげで日本は事前に防護装置を自由主義体制内に組み込んでしまった。これらの学習と工夫によって、それ以降学生運動は起こらなくなったのだ。

そして戦後から前世紀中はマルクスの言うところの一般大衆、つまり数で圧倒的な頭の良くない人々は左翼思考にはまるのが定番だったところ、やはり学習によって今で

瞑想録（その2）

はその同じ種類の人々がむしろ右翼思考にはまってネット右翼になると言う「逆転現象」まで生じている。一重に学生運動の反面教師のお陰である。そして左翼思考に安易に胡坐をかいていた朝日新聞が、今付けを払わされていると言う形だ。これは戦後レジームからの脱却であり、「新総括」と呼んでも良いだろう。

今安倍さんが目指しているのは、経済大国を通じての日本の発言力の向上だ。これは安倍さんが雌伏の時期に悟りを開いたためであって、彼としては個人的な想いよりも時の流れや天の動きを読んでいるように思う。そして彼の方向は、聞こえばかり良く中身は伏魔殿の詐欺的宗教のマルクス主義やキリスト教よりも、よっぽど人にやさしくてかつ自然である。最低限しか保証しないシステムである民主主義下では、安倍さんの出現は極めて上出来だとすら思える。ただ、その経済大国化がおそらくは必然的に貧富の差を広げ、「小数の富める者による経済大国化」になりはしないか、これが目下のところ一番のそして唯一の懸念である。

（本論は以上です）